

2019（令和元）年度 自己点検・評価報告書

神戸海星女子学院大学
2020(令和2)年7月

2019（令和元）年度 自己点検・評価報告書

目 次

I	自己点検・評価（目標）	1
II	大学・学部等の現状とその評価	
1	自己点検・評価委員会	3
2	教務委員会	5
3	F D・S D委員会	6
4	国際交流委員会	8
5	保育・教職委員会	14
6	学生委員会	15
7	キャリア委員会	18
8	ハラスメント相談委員会	21
9	入試委員会	24
10	宗教委員会	28
11	図書委員会	33
12	生涯教育委員会・地域交流委員会	36
13	英語観光学科	38
14	心理こども学科	41

2019(令和元)年度 自己点検・評価 (目標)

	委員会・学科	基準	目標
1	自己点検・評価委員会	2-⑤	内部質保証システムの適切性について定期的に点検・評価を行う。
2	教務委員会	4-⑥ 4-⑦	成績や「学生教学調査」「卒業生アンケート」等の情報から、教務関係の様々な成果を可視化し、公表する準備を整える。
3	F D・S D委員会	6-④ 10-⑤	教職員の資質向上に向け、組織的に研修や実態調査を行うとともに、それらを検証し、改善を図る。さらに、必要事項については、関係部署との連携を深める。
4	国際交流委員会	4-④ 7-②	海外での留学・研修を通して学生が自他の文化に対して正しい認識を持ち、視野を広げるために、留学・研修前後の指導・教育のさらなる充実を重点的目標とする。
5	保育・教職委員会	7-②	学生支援体制の整備の一環として、キャリアセンターとの一層の連携を図る。
6	学生委員会	7-②	「下宿生支援」を主にサポート体制を構築し、教職員の共通理解と連携を強化する。
7	キャリア委員会	7-②	就職活動の早期化に応じ、キャリアプログラムを再考し、4年間のキャリアサポートを充実させる。
8	ハラスメント相談委員会	7-②	①学生対象にハラスメント防止啓発活動を行う。ハラスメントについての理解を深め、身近な事例をもとに、対応方法や相談機関について知り、ハラスメント防止への意識を高める。 ②教職員対象にハラスメント防止研修会を行う。学生同様、ハラスメントについての理解を深め、身近な事例をもとに、対応方法や相談機関について知り、ハラスメント防止への意識を高める。
9	入試委員会	5-③	2020(令和2)年度入試において、両学科で入学定員を確保する。
10	宗教委員会	1-① 1-②	本学の建学の精神であるキリスト教的価値観への学生の理解を深める。
11	図書委員会	8-③	読書の推進を図るとともに、図書・資料の利用をサポートする学修支援を行う。
12	生涯教育委員会 地域交流委員会	9-②	①本学の社会連携・社会貢献において多方面の学外組織や団体と連携を図りつつ、教育研究及び学修成果を社会に還元する。 ②社会連携・社会貢献の適切性について定期的に点検・評価を行い、その結果をもとに改善・向上を行う。
13	英語観光学科	4-④	自他の文化に対する学生の理解を深化させ、研修やフィールドワーク等の具体的な実践に繋げる。また、各自が批判的精神(critical mind)をもって、そうした実践の再吟味・分析ができるように、公表及び報告の機会を複数提供する。さらに、発表者のみならず、発表の受容者側である学生も、発表者が実践で得た成果・認識を主体的に共有できるようにする。
14	心理こども学科	4-④	学生の主体的参加を促す授業内容や授業方法を工夫する。授業アンケート等を通して学生の実態を把握し、さらなる改善を図る。

(

(

1. 自己点検・評価委員会

P 【目標】基準2-⑤

内部質保証システムの適切性について定期的に点検・評価を行う。

D 【現状説明】

上の目標は、2018年度の2つの目標のうちの一つである。2018年度の自己点検・評価委員会報告書において次の課題及び改善策を挙げた。

<2018年度の課題及び改善策>

- ① 内部質保証システムの適切性の向上を図るため、2018年度に「神戸海星女子学院大学 改革運営会議規程」「神戸海星女子学院大学 自己点検・評価規程」「神戸海星女子学院大学 内部質保証規程」の改定案を作成した。この3つの改定案を2019年度の第1回教授会に上程する。
- ② 2018年度の自己点検・評価活動は、各委員会・学科の目標設定にあたり、「学修成果」という統一目標を設定して行ったため、各委員会・学科の点検・評価活動の目標がはっきりと定まり、全学的な統一感が生まれた。そのため、2019年度以降も個別目標の設定にあたり、全学的な統一テーマを設定し、改定した規程（①参照）に基づき内部質保証システムの適切性について引き続き点検・評価を行うこととする。

2019年度の本委員会では、上に挙げた<2018年度の課題及び改善策>に基づく取組を行った。改善策①に対する取組として、2018年度の自己点検・評価委員会で作成した3つの規程の改定案を2019年度第1回の教授会に上程し、平成31年4月1日付けで改定した（資料：「2019（令和元）年度 第1回 教授会議事録」）。

改善策②に対する取組として、昨年度に引き続き、5月29日の第3回自己点検・評価委員会で「建学の精神、教育理念・目的及びディプロマ・ポリシーに基づく、学修成果の可視化」を全学的統一テーマに設定した。このテーマを自己点検・評価委員会を通して各委員会・学科に提示し、それに基づいて各委員会・学科が個別の目標を設定することとした。なお、このテーマにそぐわない委員会はそれぞれ適切な目標を定めることとした。

各委員会・学科から自己点検・評価委員会に提出された自己点検・評価報告書（本委員会及び入試委員会の報告書を除く）を取りまとめ、3月19日に開催した外部評価委員会において外部評価委員に各委員会・学科の自己点検・評価について説明した。外部評価委員からの意見は、各委員会・学科の自己点検・評価活動を評価するという内容であった。4月8日の自己点検・評価委員会では、外部評価委員会の評価結果を報告するとともに、2019年度の自己点検・評価活動は、統一テーマ「学修成果」のもと、全学的なPDCAサイクルが適切に行われたことを確認した。

この内容を「内部質保証規程」において、内部質保証の統括推進組織として位置づけられた「大学改革運営会議」に提出する予定である。

C 【点検・評価】

2019年度の自己点検・評価活動は、昨年度に引き続き、各委員会・学科の目標設定にあたり「学修成果」という統一目標を設定して行ったため、各委員会・学科の点検・評価活動の目標がはっきりと定まり、全学的な統一感を持って、自己点検・評価活動を行うことができた。また、2019年4月1日付で施行された「大学改革運営会議規程」、「自己点検・評価規程」、「内部質保証規程」により、内部質保証システムの適切性が向上し、内部質保証の実質化への確かな歩み進めることができるようになった。この2点により、2019年度の自己点検・評価委員会の点検・評価活動は評価できる内容となった。

A【改善策】

内部質保証システムに係る3つの規程の改定及び各委員会・学科の自己点検・評価目標の設定に関する全学的な統一テーマの設定により、2019年度の目標は概ね達成することができた。2020年度以降も個別目標の設定にあたり、全学的な統一テーマを設定し、改定した規程に基づき内部質保証システムの実質化をより確かなものにすべく、引き続き、点検・評価を行うこととする。

2. 教務委員会

P 【目標】基準4-⑥、4-⑦

成績や「教学調査」「卒業生アンケート」等の情報から、教務関係の様々な成果を可視化し、公表する準備を整える。

D 【現状説明】

従来、学生に対する意識調査の結果等、教育内容及びその成果について、学内で紙媒体で閲覧できる環境はもっていたが、その他の方法で公表していなかったため、ホームページでの公表を徐々に進めている。

C 【点検・評価】

教務関係の事項で、今年度新たにホームページに掲載した情報は以下である。

- ・2018(平成30)年度 全学年 G.P.A. 分布
- ・2019(令和元)年度 春学期 授業改善に関する調査結果報告
- ・実務経験のある教員のシラバス一覧

また今後は、以下の情報の公表を計画している。

- ・2019(令和元)年度 秋学期 授業改善に関する調査結果報告
- ・2019(令和元)年度 卒業生アンケート集計結果
- ・2019(令和元)年度 全学年 G.P.A. 分布

A 【改善策】

上記の情報公表により、単年度及び卒業時の学修成果が緩やかに公表されたことになる。今後は、IR室との連携により、さらに公表すべき情報について検討していく。

また、学内における情報共有という点では、現在別々に保管されている教学カルテとマンツーマンカルテを一元管理できる方法を考え、学生一人ひとりの学修成果と修学における様々な悩みなどを、年度が変わっても容易に振り返り、把握することができるような環境を整備していきたい。

3. FD・SD委員会

P 【目標】基準FD 6-④ SD10-⑤

教職員の資質向上に向け、組織的に研修や実態調査を行うとともに、それらを検証し、改善を図る。さらに、必要事項については、関係部署との連携を深める。

D 【現状説明】

FD では、教員の資質向上及び教員組織の改善・向上につなげるための研修を行っている。SD では、大学運営を適切かつ効果的に行うために、事務職員及び教員の意欲及び資質の向上を図るための方策を講じる。2017(平成 29) 年 4 月 1 日に大学設置基準が改正され、SD の義務化が規定された。

これらの点検評価項目および統一テーマから現在実施している業務を振り返る。

(1)授業評価

春、秋の年 2 回、5 人以上の受講生のクラスで実施している。マークシートに無記名式でのアンケートをとる。質問項目例として、自分の授業に向かう態度、教員の授業評価を 10 項目で問うている。回答は 5 件法で思う、やや思う、どちらでもない、やや思わない、思わないである。その結果の全体平均は、春学期 4.09、秋学期 4.23 であり、良好な結果であった。

(2)非常勤講師との面談

専任教員は学生とは週に 1 - 2 回程度授業で学生の様子を観察する。それだけでは、個々の学生の様子はわからない。そこで、非常勤講師 47 名に FD 委員の教員が分担して面談を行った。

(3)学生に対する意見調査アンケート（任意）

授業を中心に、ふだん学生が思っていることを自由記述で回答を求めた。

(4)授業公開

春秋学期、それぞれ一コマを教員同士が自由に参観できる時間を設けた。

(5)授業出席調査

全教員が 15 回の授業、各コマにおける出席人数を調査し、出席率を出した。

(6)研修

各委員会が必要と考えた研修を悉皆で実施した。

C 【点検・評価】

上記(1)から(6)においてそれぞれについて再度点検・評価を行った。

(1)授業評価

特になし。

(2)非常勤講師との面談

非常勤講師の授業時間に合わせるので、専任教員の授業との調整が難しい場面もあ

った。学生の授業態度等、概ね良好との意見が多かった。また、継続して面談していることで、講師の先生方も要望を言いやすくなつた。

(3) 学生に対する意見調査アンケート（任意）

今年度は、英語観光学科 54.3%、心理こども学科 32.7% 全体で 45.3% の回収率であった。例年 4割程度の回収率があり、学生にとっても自分の考え、意見を伝える場となつてゐる。

(4) 授業公開

個々人の専門領域が違うので、互いに見合うまでには至っていない。

(5) 授業出席調査

春秋学期共に、全授業の平均出席率 86.1% だった。欠席する学生が固定化していることに課題が残る。

(6) 研修

各委員会等で必要と考えられる研修が実施されている。悉皆をめざしているが十分とは言えない。

A 【改善策】

今回、授業評価の一つである「学生が授業に向かう姿勢」において、授業の予習、復習の取り組み状況は、春 3.46、秋 3.74 という結果で、他の項目と比較すると低いことが明らかになった。シラバスには、予習復習内容を記入することになり、教員個々人が、予習復習の必要性を意識しやすくなっている。今後は、学生の予習復習についての意識を高めるために、Web シラバスで予習復習内容を確認するよう、更に指導が必要である。

非常勤講師との面談では、委員会で情報交換した後、関係部署にも伝えることで改善された事例もある。様々な調査、アンケートを行つたが、年度末に一斉に改善策を話し合うだけではなく、委員会開催時に少しずつ出し合つてきたことは良かったと言える。さらに、非常勤講師との面談では、内容によっては情報共有の場を広げる必要もあるだろう。

研修については悉皆ではあるが、公務等で出席できない教職員を除いて、全員に近い教職員が研修に参加できる工夫も必要である。

各委員会主催（SD として）の研修会は悉皆となつた。せっかくの良い機会なので、次年度に生かすために各回アンケートをとる方向で検討する。

4. 国際交流委員会

P 【目標】基準 4-④

海外での留学・研修を通して学生が自他の文化に対して正しい認識を持ち、視野を広げるために、留学・研修前後の指導・教育のさらなる充実を重点的目標とする。

D 【現状説明】

本年度の目標は、前年2018(平成30)年度の目標理念を継承し、それをさらに具体化したものである。つまり前年度報告書の改善策で挙げた項目(留学の質的向上を図るために大学側の「さらなる強力なサポート体制」確立)に重点がおかかれている。学生の留学目標達成に対して行う、教育者側の積極的な指導・援助の一環として、英語コミュニケーション能力を含む英語の総合力向上と国際理解教育の両側面から教育的配慮・意図を反映する働きかけを行った。

参照：「国際交流委員会2018年度報告書[改善策]」より引用

具体的な方法としては、留学・海外研修前に各学生に予め課題アンケートを配布し、留学・海外研修中、異文化等についての具体的課題・項目について実際に観察・熟考する機会を与え、最終的にその成果を自らレポートにまとめ上げさせることによって、学生が異文化理解をさらに深め、国際感覚を磨くように指導する。そして帰国・復学後、学生から提出された課題レポートを留学・海外研修前のものと比較し、学生の留学成果の量(留学期間、授業時間等)のみならず、それらの質(語学、国際理解等)も検証対象とする。

現状説明は以下の項目に分けて記す。

- (1)英語の総合力向上に関して
- (2)異文化理解教育
- (3)留学、研修報告会
- (4)フランスからの留学生の受け入れ

(1)英語の総合力向上に関して [資料1-①、1-②]

添付資料の「留学前、留学後、多読課題後の英語力の比較」では以下のようなことが考えられる。留学前後における英語力の推移は、個人差もあり一概に判定するのは難しいが、少なくとも現段階での全般的な傾向は把握可能である。

①TOEICにおける比較

留学直前の2018(平成30)年7月と帰国後の2019(令和元)年1月、そしてその6か月後の7月に実施したTOEICテスト結果は以下の通りである。

2019(令和元)年7月：留学後、例外（学生H、学生I）はあるものの全体的に上昇がみられる。平均上昇ポイント 59.4。

2020(令和2)年1月：例外（学生F）はあるものの、全体的にさらなる上昇がみられる。

平均上昇ポイント 75。

留学直後より、留学後6か月を経た場合のほうがポイントが有意に上昇するのは、留学経験により得た英語力が実力として定着するのには一定期間を要するということや、留学によって自信がつき学習意欲が増してきたことが考えられる。極端な場合では、留学直後より6か月後のほうが、90 ポイントも上昇している（学生I）こともある。

②リスニング力（英検2級程度）の比較

留学前と留学後の比較：平均上昇ポイント 2.9

留学前と留学後・多読訓練後の比較：平均上昇ポイント 4

留学後にリスニング力が向上することは当然予想されることだが、多読という読解力の訓練もまたリスニング力に大いに影響をもっていることが推測できる。

③読解力（使用速読教材：英検 3級～準1級程度）の比較

留学前と留学後の比較：平均上昇ポイント 3.4

留学前と留学後・多読訓練後の比較：平均上昇ポイント 3

読解力に関しては、上記②の「リスニング力」の場合とは逆の現象が起きている。

学生が読解力よりも英会話力等に圧倒的興味をもっている背景も影響しているだろうが、読解力の養成には日々の地道な努力が不可欠であるように思われる。

*上記報告では、調査対象者数が多く収録データの整った添付資料1-①、1-②のみを資料として取り上げている。それ以降の年度の資料はデータ等が整った段階で順次精査していく予定である。

(2)異文化理解教育 [資料2-①、2-② 2-③]

留学前に学生に予め以下の2種類の課題を与えている。

留学課題 1 ループリック

學習到達度を評価項目とレベルの表形式で表したループリックを用いて、各学生に自己評価させ、異文化の理解度の推移を測る。留学1週目と帰国後の異文化理解度の変化を精査する。

留学課題 2 留学先でのインタビュー

現地で出会った人たちにインタビューするという実体験を通して学生が他文化及び自己の属する文化についてさらに積極的な多文化理解を推し進める。

上記課題の目的は、留学前教育と留学後教育の両側面に関わるものとなる。つまりそれは留学後における各学生の多文化理解の成果を測ると同時に、留学前教育として、学生に予め留学の本質的な問題に触れさせ、予備知識を与えることであり、留学の具体的な目的意識を喚起する意味がある。

(3) 留学、研修報告会 [資料 3]

留学から復学した学生は、多人数の聴衆を前に自分の留学体験を発表することになる。プレゼンテーションの見地からすれば、そうした方法を学び、スキルを実践するよい機会となる。しかし、さらに重要でさえあるのは、こうした報告会では、学生が自らの体験を客観化し、留学での学びをしっかり認識し直し、自分の中に定着させることが可能となる点であろう。

この報告会は、発表者にとっては自己表現を通した自己認識の契機となるのだが、同時に、将来留学を目指す学生、あるいは諸般の事情により留学が困難な学生にも、学生目線で留学についてのリアルな情報を提供することになり、発表者は、下級生(1, 2年次生)に対し、留学の具体像を示し、また異文化を自らの視点で伝えるというミッションも果たしている。

(4) フランスからの留学生の受け入れ [資料 4]

この件に関しては、当初、委員会の予定にはなかったが、フランスのサンローラン学園から申し入れがあり、当学園の高校生(6名)を本学に受け入れた。期間は2019(令和元)年10月23日～10月28日という短期間ではあったが、日本とフランス双方の学生、生徒が国際交流のまたとない機会をもち、この交流は双方にとって生きた異文化理解の教材ともいいうべきものになった。

C 【点検・評価】

本年度の目標は、前年度、報告書に挙げた各項目の実践であるが、前年度の【点検・評価】で記した「学生に提供する留学・海外研修の量のみならず、その質(外国語習得、社会研修の核となるべき学生の国際的視野の深化と拡大、そしてそれにともなう自他文化への正確で深い理解等)の検討」は、今年度、実践の段階に入り、その端緒として一定の成果は得られているようと思われる。しかし同時に、今回いくつかの課題も明らかになってきている。以下に4項目に関する点検・評価を試みたい。

(1) 英語の総合力向上に関して[資料 1-①、1-②]

学生の英語の総合力を養成するためには、きめ細かい成績の推移の査定等が必要となるが、より正確な成果を得るには、ポイント(量)にのみ着目するのではなく、その内容(質)の精査が有効になる。現段階でもすでに一部その実践がなされており、たとえば、[現状説明]で言及した「例外学生」H、Iの場合を取り上げ、留学前と留学後のポイント推移をみてみると興味深い示唆が得られる。

(留学前との比較)	留学直後ポイント	留学6か月後ポイント
学生H：	-10	+55
学生I：	-60	+30 *2年前との比較 +120

また、あと1名の韓国への交換留学生Gの成績を精査すると、ポイント以外の推移も読み取れる。Gには速読の効果を示す成績の顕著な推移はみられないが、Gが速読の課題に対し自発的にすべて英文で解答している点は注目すべきである。

以上の傾向は、3学生の留学が英語圏国への語学留学ではなく、韓国交換留学という別種のものであったこと、その他、学習意欲の変化、自発性の高揚、さらに教育効果に必要な定着期間等とも関連していると考えられる。今後、学生の留学成果向上のためには、ポイントのみならず、その背後にある諸要素への着目もさらに有益かつ重要になってくるだろう。

(2) 異文化理解教育 [資料 1-①、1-②]

課題1： アンケートの対象者は現在のところまだ少数であり、複雑かつ多様な側面をもつ「文化」の理解の測定は容易ではないが、ある程度の理解の深化は測定可能であったと思われる。そしてなによりも、今回のこの試みによって今後の「異文化理解」に関わる検証の端緒を切り拓いた意義は大きいだろう。

課題2： アンケートは自由記述形式であり、各テーマへの回答も多岐にわたるため結果は、現在精査中である。

*詳細に関しては特に[資料 2-③]を参照にされたい。

(3) 留学、研修報告会

上記報告会は、主に留学した学生に自らの留学成果の総括と、そして将来留学を希望する学生への情報提供、留学への意識の啓発を念頭においてはじめられたものだが、教育という側面でみれば、経費等の問題で留学が不可能な学生にも、いわば擬似留学を経験させるよい機会となっている。

(4) フランスからの留学生の受け入れ

プログラム自体は、上記【現状説明】で記したように、学生の国際教育としては最適な成果を得られたと考えられるが、他方、初めての試みであり、しかも急な計画であったこともあり、プログラムの準備・遂行には、国際交流委員会の委員をはじめとして、教職員に激務を強いることとなっている。

A 【改善策】

改善策は、すでに【点検・評価】によって焙り出されている問題の解決策の提案となるが、ここでもまたこれまでの4項目について記す。

(1) 英語の総合力向上に関して

(2) 異文化理解教育

上記の2項目に関しては、2年度にわたる継続目標の一環であり、関係者の地道な努力によって、学生の英語力向上のための指導への貴重な示唆がみられはじめているので、将来も継続的にこの方向性で進めていくことを予定している。改善策というよりは、むしろ強化策として、今後こうした資料・分析を単に報告書としてだけではなく、さらに体系的な一つの知見としてまとめ上げていく可能性を考えている。

(3) 留学、研修報告会

上記報告会は、今後も従来通り踏襲していくべきだと考えられる。そして改善すべき点は、「報告会」自体であるよりは、むしろ今回、そこから焙り出されてきた問題点にあるように思われる。前述したように報告会は、確かに留学できない学生に留学の擬似体験を可能にするメリットはあるが、それは同時に、学生の実際の留学を阻む大きな要因の一つが留学経費の問題であることを再認識させてくれる契機となった。より多くの学生に、「擬似」ではない本物の留学を可能にするためにも、奨学金、支援金制度の洗い直しが肝要である。また交換留学では、留学先大学の授業料免除があり、そうした特典付の協定校の拡大が必要不可欠であると考える。

(4) フランスからの留学生の受け入れ

本企画は、本来予定になかったこともあり、準備不足の点が多々あったことは今後改善すべきである。しかし、改善すべき方向性としては、今後こうした急な企画を避けるという消極的姿勢であるよりは、むしろこうした企画でも好機を正面から受け止めるという積極性へのシフトに重点をおくべきであろう。大学側の熱意と覚悟、そして国際交流委員会のみならず、大学が一丸となった、積極的な受け入れ体制の構築が急務であると考える。

こうした海外の大学（高校等も含む）とのネットワークづくりは、本学の協定校の拡大にもつながり、また交換留学制度等の充実は、学生の経済的負担を軽減し、留学機会の均等・拡大にもつながる。この点は上記3.で記した改善策とも重複してくるのだが、さらに広い、本質論的観点からいえば、グローバル化が急速に進む現代、日本が海外に対してもいつまでも旧態依然とした“Closed Book”的存在であってはならないのであり、今回のサンローラン学園との交流で双方の学生、生徒がいみじくも築き上げた相互援助の関係は、もっぱら（語学力も含めて）海外の文物を“Take”しようとする従来の留学における一方的な関係性を超越したものであり、国際交流のあるべき姿、つまり相互理解・相互協力の将来的な可能性を示しているように思われる。

こうした見地からの改善は一朝一夕には成し遂げられるものではないだろうが、これもまた他の点検項目同様、将来に引き継いで地道に努力して改善していく価値のあるものだと考えられる。

添付資料：1-①「2018年秋出発：留学前、留学後、多読課題後の英語力の比較」

1-②「2018年秋出発：留学前、留学後、多読課題後の英語力の比較：
多読教材内容表」

1-③「2019年春出発：留学前、留学後、多読課題後の英語力の比較」

1-④「2019年秋出発：留学前、留学後、多読課題後の英語力の比較」

2-①「課題1 ループリック」「課題1 ループリック結果1~2」

2-②「課題2 インタビュー」

2-③「留学課題（異文化理解）について」

3「留学、研修報告会」

4「サンローラン学園10月企画について」

5. 保育・教職委員会

P 【目標】基準7-②

学生支援体制の整備の一環として、キャリアセンターとの一層の連携を図る。

D 【現状説明】

(1) 再課程認定スタート

今年度から教職課程再課程認定に基づいた授業を展開している。

(2) 保育士資格取得カリキュラムについて

今年度の入学生から新たな保育士課程をスタートさせ、保育士資格及び幼稚園教員免許状の両方を取得できるカリキュラム編成の一環として、学生の負担軽減を図るため保育士資格課程及び幼稚園免許状課程に共通の科目を設置した。

(3) 心理こども学科のカリキュラムを再編成した結果、卒業要件が分かりやすくなり学科の特長を生かせる科目編成になっている。

(4) 教職か企業就職かで迷う学生も多く、その指導のため、キャリアセンターとの報告連絡相談を密にした。

C 【点検・評価】

(1) 次年度から、二学年同時期となる実習が予定されている。そのため今年度から実習施設の早期確保を実施している。

(2) 本年度から学生要覧に保育・教職センターの業務の追加一覧を載せている。

(3) 保育・教職（幼）向けの「就職の手引き」を作成し、活用をしている

(4) 4年次生を対象にした就職対策講座を実施し、就職活動の意識づけとしている。

(5) 保育・教職センターの支援体制と連携して、資格取得及び就職支援を行っている。

(6) キャリアセンターが実施している様々な就職指導、ガイダンス等に教職関連の実習に参加している学生も参加できるように日程等の配慮をした。更には実習等で参加が出来ない学生にも別途個別に連携し、学生支援の成果を上げている。

(7) 教員採用試験対策講座を開催している。

A 【改善策】

(1) 本年度より学生の就職内定や採用試験結果等の進路状況を保育・教職委員会で随時報告している。これは全教員が学生の進路状況の情報を共有することになっている。この情報を基に激励や追指導の学生支援を行い、小人数大学ならではの効果を上げている。より効果的な情報提供に取り組みたい。

(2) 進路調査等の情報について所管を超えて共有し、学生の指導がさらに出来るようになりたい。

6. 学生委員会

P 【目標】基準：7-②

「下宿生支援」を主にサポート体制を構築し、教職員の共通理解と連携を強化する。

D 【現状説明】

本学の新入生は、下宿生の割合が年々増加傾向にある。親元を離れて生活をしている下宿生に対し、2018(平成30)年度までは、養護教諭が生活全般についての指導を個別に行っていた。しかし、2018(平成30)年度末は下宿生27名に対し6名が休学または留年という状況になり、下宿生が学業を続けることの困難さが浮き彫りになった。また、下宿生の指導を担っていた養護教諭が学院保健センター所属になったことに加え、2019(令和元)年度に入学する下宿生は著しい増加が見込まれたことで、個別指導はますます難しい状況になることが予測された。以上のことから、一人暮らしの学生支援の強化を望む声が担任から上がり、2019(令和元)年1月29日に学生委員会主催で試験的に「下宿生交流会」を開催したところ、学生から会の発足を求める要望があり、本年度から本格的に始動となった。下宿生が気軽に集まり、一人暮らし特有の話を語り合うことができる場所作りとして始めた「下宿生交流会」は、2019(令和元)年度に全7回の集会を行った。なお「下宿生交流会」は、下宿生だけでなく留学生とも懇親を深め、国際的な文化交流も図ることができる場にしたいという学長の発案により、夏に「下宿生・留学生交流会」と改めた。これにより、下宿生に限らず、下宿生や留学生と交流を図る意思のある全学生が所属できる会として運営できるようになった。

回数	日 時	参加 人數	内 容
1	2019年5月14日(火) 昼休み	15	顔合わせ会
2	7月17日(水) 昼休み	9	夏休み企画についての相談
3	9月24日(火) 13時～17時	7	ボーリング大会とお茶会
4	12月6日(金) 昼休み	4	クリスマスキャロル演奏の提案
5	12月13日(金) 昼休み	9	クリスマスキャロル演奏の練習
6	12月19日(木)	8	クリスマスキャロル本番前練習と本番
7	2020年2月7日(金) 14時～	6	鍋パーティ

第1回には、1年次生を中心に15名の学生が集まった。2名の4年次生が、活発な発言で場を盛り上げた。すぐにグループラインを開設し、現在17名が登録している。第2回では、学生から希望が出たボーリング大会についての詳細を相談した。第3回のボーリング大会は、学生課が食堂で使える食券等の景品を準備し、学生・教職員11名でボーリ

ングを楽しみ、その後お茶会を行った。下宿生たちは、教職員や上級生にフランクに質問をし、今後の学生生活を模索する場面が見られた。しかし、春学期末には、第1回の集まりに参加していた学生を含む3名の退学者が確認された。続く第4回の集まりは、現状把握と学年度末実施希望であった鍋パーティの相談の予定だったが、学生部長がクリスマスキャロルで演奏することを呼びかけ、翌週に練習のための会合を開催した。当日は事前練習を行い、8名が息を合わせてトーンチャイムを演奏した。従って、年度末の鍋パーティの詳細はラインでの相談になったが、自発的な発言が少なかったため学生課で概要を定め、学生課から下宿生・留学生全員に海星メールで招致を行った。実家に帰る準備のために当日キャンセルの欠席者があったが、学内で勉学に励んでいた3年次の学生2名が参加し、6名で鍋をつつきながら交流を楽しむことができた。

現在本学には、この「下宿生・留学生交流会」の他に、3つのサポートルームが存在する。①主にカウンセラーと養護教諭が対応する「学生相談室」、②合理的配慮を要する学生も対象とし、心理学の教員が相談や学修支援を行う「サポートルーム Stella」、③学生によるパソコン等の学修支援を行う「授業サポート」である。②③のサポートは2018(平成30)年度から始まり、重要な役割を果たしているものの、組織的な連携体制は整わず、責任者・指令者は不透明な状態といえる。そこで、大学としてのサポートの指針を明確にすること、教職員全員が合理的配慮を含むサポート全般に対する共通の理解と認識を持つこと、そしてサポート体制を見直し組織として確立させること等を目的として、2019(令和元)年2月12日(水)に京都大学学生総合支援センター 船越高樹氏による「障害学生支援における合理的配慮」というFD・SD研修会を開催した。

C【点検・評価】

「下宿生・留学生交流会」については、学生課・学生部長からの單一方向によるアプローチの傾向が強かったが、ボーリング・トーンチャイムの演奏・鍋パーティなどそれぞれの活動内容の効果により徐々に学生同士の交流が深まる光景が見られた。そして、全7回の集まりすべてに出席した学生2名が、次年度は2年次生として、教職員視点からではなく、同じ学生同士の立場でサポート体制を築き、会の運営を行うことを期待する。

また、FD・SD研修会は、とても大きな反響を得ることができた。非常勤教諭を含む教職員から多くの質問が寄せられ、再度開催を要望する声も数多く上がった。合理的配慮の理解も深まり、サポートに対する意識づけもできたと考えられる。そして現在本学で行われているサポート体制に対する意見交換の場が設けられ、個々に活動していたサポート体制が見直された。これにより、本学の各サポートルームは役割分担が明確になり、組織として、さらに本質を前面に打ち出し稼働することが期待される。この研修はとても大きな効果があったと考えられる。

A 【改善策】

「下宿生・留学生交流会」については、全会合に出席をした2名の学生を中心に、学生課・学生委員会がサポートを行いながら、学生自身で運営できる会に発展させたい。そのために、4月のオリエンテーション時に「下宿生・留学生交流会」の周知を確実に行い、会に参加しない、またはできない学生へは個別指導を行い、積極的にアプローチを続ける。また、次年度も FD・SD 研修会を開催し、本学のサポート支援体制のガイドラインの作成を実現させたい。すなわち、教職員が共通の理念を持ち、本学の特色であるきめ細かなサポートを推進し、教職協働で退学者の減少に尽力するとともに、学生支援の充実に努めたい。

7. キャリア委員会

P 【目標】基準：7-②

就職活動の早期化に応じ、キャリアプログラムを再考し、4年間のキャリアサポートを充実させる。

D 【現状説明】

大学生の就職活動の早期化が顕著である。2019(令和元)年度は、現在と同じスケジュールになった3年前に比べ、5月末における内定率が22ポイントも増えている。この原因として、売り手市場であること、経団連の就職協定のルール廃止により企業が解禁日を遵守しなくなったこと、インターンシップが事実上就職活動のスタートになっていることが考えられている。また、通年採用という、新しい動きも提言されている。そのため、本学においても低年次から、自身の将来や職業に関して意識づけをし、自分のキャリアについての考えを確立させておく必要があると考えた。

まず、1年次に配当されている「キャリアデザイン」についてである。2018(平成30)年度までは、キャリア委員会が関わる授業は、学長の講話1回とキャリアセンター担当の適性検査とその解説の計3回であった。2019(令和元)年度からはシラバスを改編し、次の表で示す通り、キャリアセンター員と学科教員の授業を加えた。これにより、1年次から職種・職業という具体的な像をとらえ、学科と職業の関係を関連づけることができると考えた。

【キャリアデザイン】

2018年度 内容・担当	2019年度 内容・担当
適性検査（キャリアセンター員）	KAISEI パーソナリティを学ぶ（学長）
ライフデザイン解説&理解	適性検査（キャリアセンター員）
KAISEI パーソナリティを学ぶ（学長）	適性検査の結果報告（キャリアセンター員）
	本校のキャリア教育（キャリアセンター員）
	将来のために今やるべきこと（学科教員）

また、2年次に配当されている「海星学」においては、「海星学Ⅱ」で計4回の実施していたキャリア教育の授業を、2019(令和元)年度は「海星学Ⅰ・Ⅱ」において各4回、年間で計8回のキャリアプログラムの実施を提案した。具体的には、次の表の通りである。

	2018年度 内容・担当	2019年度 内容・担当
【海星学Ⅰ】		キャリアプログラム1「社会を知る」 (日本年金制度)
		キャリアプログラム2「社会で働く」とは (外部講師)
		キャリアプログラム3「職種・業界」を学ぶ (外部講師)
		キャリアプログラム4「キャリアを考える」 (キャリアセンター員)
【海星学Ⅱ】	日本年金制度	キャリアプログラム1「卒業生によるピアサポート①」
	就職先に関する業界研究	キャリアプログラム2「卒業生によるピアサポート②」 (キャリアセンター員)
	卒業生によるピアサポート①	キャリアプログラム3「社会で働く①」 (キャリアセンター員)
	卒業生によるピアサポート②	キャリアプログラム4「社会で働く②」 (学科教員)

2年次にキャリアプログラムを追加した狙いは、自身のキャリアに対する意識を深め、自己の専門分野と社会との関係が構築できるように導くためである。本学のキャリア教育の根幹は、本学の教育理念である。すなわち、社会や企業が求める「人間力」を身につけるための素養を示した KAISEI パーソナリティの学修である。「海星学」の授業において、内面を磨き自己を高める KAISEI パーソナリティの学修を基礎に、外部講師、学科教員、キャリアセンター員、及び卒業生の講話により多方面からの刺激を受けることで自身を感化させ、自己の知見を高める、併せて海星学で実施しているボランティアの実践や研究発表を行うことにより、キャリア形成の枠組をしっかりと固めることができたと考えた。

C 【点検・評価】

1年次の「キャリアデザイン」は、グループワークを中心に、聞く・書く・話すなどの基礎能力を高めるためのグループワークが中心の授業である。ここにキャリアセンター員と学科教員の授業を付加することにより、学生は早期から自分の目指すべき方向を捉え、いくつかの道を具体的に感知することができたと考える。また、海星学Ⅰでは、キャリア教育専門の外部講師が、2年次春学期に相応だと考えられる授業を実施した。専門家ならではの洗練された見せ方と熟れた話し方で、社会について、また働く意味等について学ぶことができた。それに追従し、キャリアセンター員が本学におけるキャリアの支援体制を紹介することで、漠然と捉えていた将来を近い現実として認識することができた。続く海星学Ⅱでは、学生にとって身近な存在である2名の卒業生の講話を聴き、就職や実習・インターシップに対する意識を高めた。キャリアセンター員がそれらの講話のまとめを行い、さらに学科教員が今後取り組むべき事項を学科別に指導することにより、目の前に迫っている次のステップへの歩みを示唆した。キャリア教育の時間を増やし、授業毎に

振り返りを課すことで、様々な角度から自己を、そしてキャリアを考える機会が提供できたと考える。

A 【改善策】

キャリア委員会では、常に学生の声や要望に耳を傾け、積極的、意欲的にキャリアプログラムの見直しに努めている。今年のシラバス改編に対しては、卒業生の講話であるピアサポートは、等身大の目線でキャリアを考える貴重な機会であるため、関心の少ない分野の講話より興味がある分野の話を聞きたいという声が挙がった。この要望を受け、一般企業への就職者と保育・教育職それぞれ1名ずつに依頼していたピアサポートを、次年度は業界を代表する2名ずつの卒業生に講話を依頼し、学科を問わず、学生が聞きたいクラスを選択し受講できるよう、準備を進めることにした。これにより、ピアサポートの時間が、一段と有意義な時間になると確信する。

合わせてキャリア委員会は、社会の就職活動の早期化を察知したうえで、本学の学生の気質や状況等と照合しながら検討し、指導・支援を行っている。そうした状況下、単独の委員会だけで施策を実行するのではなく、他部署との協議、連携を図ることの必要性も強く感じている。本学のキャリア支援の柱は、キャリアセンターと保育・教職センターである。キャリア教育を推し進めていくうえで、保育・教職センターとの連携や共同歩調は不可欠である。合わせて、二義的な目標として、今年度キャリアポートフォリオの作成も考えていた。4年間のキャリアプログラムを再考していく過程で、学年ごとの到達目標や現状を書き記すキャリアポートフォリオ（案）を作成した。そして、10月と2月の2回、キャリア委員会で審議を重ねた。しかしこのキャリアポートフォリオも単独で作成、提示できるものではなく、教務課が実施している学修ポートフォリオと合わせて練っていく必要がある。従って、教務課と連携を取りながら、より良いポートフォリオの作成を目指して引き続き検討を重ねる所存である。次年度も、小規模大学の特性を生かし、一人ひとりの夢の実現のためのキャリアサポートを、教職員協働で推し進めていきたい。

8. ハラスメント相談委員会

P 【目標】基準7 学生支援②

- (1)学生対象にハラスメント防止啓発活動を行う。ハラスメントについての理解を深め、身近な事例をもとに、対応方法や相談機関について知り、ハラスメント防止への意識を高める。
- (2)教職員対象にハラスメント防止研修会を行う。学生同様、ハラスメントについての理解を深め、身近な事例をもとに、対応方法や相談機関について知り、ハラスメント防止への意識を高める。

D 【現状説明】

(1)に関しては、2019(令和元)年7月の基礎ゼミの時間を利用して、ハラスメント防止啓発活動を実施した。授業の一環だったこともあり、出席率は84%であり、前年度の83%から微増、8割台の高い参加率を維持できた。昨年度同様、ハラスメントに関する基本的な知識をDVD視聴を通じて学び、また、昨年度までに実施した学生対象ハラスメント防止研修会で取り上げられた事例や質問についてまとめたレジュメを共有した。最後にアンケートを実施した結果、回答者の97%が研修に満足していた。英語観光学科の2名の学生が「やや不満」と回答していたが、その理由についての記述は無かった。また、内容については、程度の差はあるが全員が「理解できた」と回答、理解が「難しかった」という回答は見られなかった。そして、ハラスメントを見聞きした体験について、英語観光学科4名、心理こども学科7名が「ある」と回答、更に、ハラスメントに実際に遭遇したことがある、という当事者は、英語観光学科2名(内、1名は相談経験なし)、心理こども学科は7名(内、1名は相談経験なし)という結果であった。最後に自由記述においては、無自覚なハラスメントや国公立の大学での酷い事例への驚きについてのコメントが多く、アルバイト先でのトラブルについての関心の高さが明らかになった。また、ハラスメントという言葉は知っていたが、その種類や内容について初めて理解できた、すぐに相談に行くようにしたいと思う、と多くの学生から肯定的な回答が得られた。

(2)に関しては、2019(令和元)年9月4日の午前10時40分から90分の教職員対象ハラスメント防止研修会を実施した。グループワークの実施の為に、時間を30分拡大し、本学に合わせて講師とハラスメント相談委員会でワークを新たに作成した。早い時期からの全学への研修告知と、非常勤講師には個別に会の案内を配布した。その結果、出席

率は専任教員の参加が95%と前年度の85%より増加し、非常勤講師も3名（昨年度は2名）参加した。職員の参加は11名で、合計33名が出席した。講義を通じてハラスメントについての理解を深め、本学で起こり得るような架空事例の課題4つを用いてグループワークとシェアリングを実施した。アンケートを実施した結果、82%が研修に満足と回答、1名のみ「不満」であり、その理由として、「グループワークは講師は多様な意見を受け止めてほしい。否定が多すぎる。」という記載があった。グループワークは概ね好評であり、「学生の声を詳しく集めて、それに対して考えるワークがしたい。」「改善例、失敗例の比較を通じて学べるようなワークがしたい」等のコメントを頂いた。学生からの逆ハラスメントについての質問も挙げられる等、定期的な研修の必要性が多数書かれていた。

C 【点検・評価】

(1) 8割以上の高い参加率が維持出来た。アンケートの結果、「ハラスメント」という言葉は前年度より浸透しているが、その種類や内容はあまりまだ知られていない事、また、ハラスメントに遭遇したことがある学生の大半（9名中7名）が、誰かに相談しており、相談に繋がりやすくなっている変化が明らかとなった。例年通り、大事な事を知ることができてよかったです、必要な研修であった、とのコメントが寄せられたため、伝えるべき内容は学生に理解されたと考える。「不満である」と答えた一名の学生の、不満の理由がわからなかった。現在のアンケートの形式を修正し、どのようなことがわかったと思うかについてや、新たな気付きや学びの有無、研修を役立てられると感じたかどうかについて問う項目の必要性が示された。

(2) 早いタイミングでの研修実施の告知や、全非常勤教員への案内の配布を実施したことにより、専任教員、非常勤教員の両方で出席率が増加した。前年度の反省から、研修時間を90分に拡大したため、以前から希望が挙げられていたグループワークの実施が可能になり、これに対して、大半が有意義な時間であったと捉えていた。約一名より、研修への不満が表明され、理由として、講師に対して、「否定的な意見が多い、表情がキツイ」等のコメントが挙げられた。研修実施後の委員会では、職員研修が一つの相談機関からの講師派遣に偏っているため、前年度と内容が被っているところもあった。また違う立場の専門家の意見も聞いてみたい、との意見が寄せられた。

A 【改善策】

(1) 実施の日程、方法については、現在の形で次年度以降も継続していく。理解度を問

うアンケートに関し、現状では、理解の詳細について把握することが難しいことが明らかとなった。そのため、次年度以降は、具体的なハラスメントの種類に関しての理解、新たな気付きや学びがあったか、あったとしたらそれは何か、また研修の内容を役立てられると思うか、思わない場合に、その理由等を問う内容に改編していく。

また、ハラスメント関係の図書等の紹介を基礎ゼミの中で実施できるように準備していく。昨年度はハラスメントに関するリーフレットを一部図書館に置かせていただいたが、本年度は予算で購入したハラスメント関連の図書を教職員が閲覧可能な場所に設置予定である。次年度は、学生が閲覧できる図書の購入と紹介を積極的に実施していく。

(2) 告知の方法や研修時間の拡大で、出席率は改善され、以前から希望のあったグループワークを実施することが出来た。次年度も同様の形で実施する。また、内容に関しては、2年連続、同じ相談機関からの講師派遣であったため、内容が重複していたという指摘もあった。そのため次年度は視点を変えて、職場のパワーハラスメントの防止についての研修企画を計画中である。次年度も、ハラスメント関連の研修会や図書の紹介を適宜行い、ハラスメント相談委員の自主学習のためのDVDや図書を購入し、教職員が閲覧できるよう計画する。

9. 入試委員会

P 【目標】基準5-③

2020（令和元）年度入試において、両学科で入学定員を確保する。

D 【現状説明】

本学では3年連続で入学定員を確保できた。しかし、18歳人口の急激な減少や共学志向など、本学を取り巻く状況はさらに厳しくなっているので、昨年に続き本年度も定員確保を目標とした。そのためには、本学の名前、学科内容、特徴などを受験生や高校・塾の先生方、保護者の皆様に知っていただくことが必要である。そこで以下のような広報活動を行った。

- ・大学案内、各種リーフレットの作成
- ・ホームページでの本学の内容紹介
- ・SNSを活用した副次的広報
- ・オープンキャンパスを夏期を中心に8回、それに加えて個別相談型オープンキャンパスを開催
- ・土曜進学相談会（祝日や入試開催日を除く）を開催
- ・DMハガキを2回、1000件ずつ送付、業者からも別に送付
- ・一斉メール（メール・マガジン）の配信
- ・高校・塾教員対象説明会=年4回（本学2回、大阪1回、姫路1回）
- ・高校訪問（全教職員で1校につき複数回）
- ・高校宛の一斉ファックス（入試・オープン・キャンパス情報）=月1回程度
- ・交通広告（山陽電鉄と神戸市営地下鉄）
- ・高校等での進学相談会・出張授業（147件）
- ・来校者や進学相談会参加者に対応した教職員による礼状の送付。

以下のような多様な入試日程を設定した。

- ・AO型【KAISEI】入試（Ⅰ期～Ⅳ期）
 - ・指定校推薦
 - ・公募推薦（A～D日程）
 - ・一般入試（前期A・B日程、後期A・B日程）
 - ・大学入試センター試験利用試験（Ⅰ～Ⅲ期）
- Ⅰ期で、2科目型、3科目型を設定

入学生を確保するため、以下のような授業料免除、奨学金制度を設定した。

- ・英検2級相当以上の資格を有する入学者に授業料免除制度
- それぞれの資格のスコアによって春学期または1年間の授業料を免除する。

- ・奨学金給付制度

指定校推薦、公募推薦 A 日程の専願受験者で奨学金給付制試験の受験者の各学科 1 名の成績優秀者に、入学年度の春学期及び秋学期の授業料等の半額相当額を給付する。

- ・入試成績優秀者奨学金制度

一般前期 A 日程で学力検査の得点率が 80%以上の受験者、大学入試センター試験利用 I 期日程で学力検査の得点率が 70%以上の受験者に入学年度の 1 年間の授業料及び施設設備費相当額を免除する。

- ・入学金免除制度

公募推薦 A・B 日程専願者で同窓生子女及びカトリック系高等学校出身者を対象として入学金を免除する。

・大学入試センター試験利用 I 期の 3 教科 3 科目型志願者で学力検査の結果が得点率 70%以上の志願者すべてに入学金の一部（10 万円）を免除する（入学後の返還）。

以上のような奨学金制度、入学金免除制度を設け、入学者増をはかった。

C 【点検・評価】

オープンキャンパスの参加者 367（昨年 356）、保護者等が 262（昨年 223）名、土曜進学相談会での来校者は 3（26）名。志願者は英語観光学科 144（昨年 127）名、心理こども学科 92（昨年 64）名、全学で 236（昨年 192）名、合格者は英語観光学科 138（昨年 122）名、心理こども学科 86（昨年 61）名、全学で 224（昨年 181）名であった（資料 1）。

大学全体で 4 年連続入学定員を確保することができ、昨年の 109 名（+編入学 1 名）には及ばなかったが、107 名（+編入学 2 名）と定員の 112%を確保することができた（資料 2）。入試日程では A0 型で 34 名が入学し、日程別では最多であった。指定校推薦は両学科で 17（昨年 12）名と昨年よりは増加したとはいえ少なかったが、これは以前なら指定校で入っていた受験生が合格時期の早い A0 型に流れたことや、高校進路指導として指定校推薦を敬遠する傾向にあることなどが影響していると思われる。

心理こども学科は A0 型 13（昨年 16）名、指定校推薦 7（昨年 9）名と前半の入試で、昨年は全入学生の 69%を確保したのに対し、本年は 54%の確保に留まったが、後半の入試が公募推薦 7（昨年 4）名、一般 7（昨年 3）名、大学入試センター試験利用 3（昨年 3）名と昨年に比べ堅調で、昨年より 1 名多い 37 名の学生を確保することができた。

これに対し、英語観光学科は A0 型では 21（昨年 13）名の入学者があり、指定校推薦は 10（昨年 3）名と前半の試験で昨年より多くの学生を確保したが、後半では公募で 13（昨年 14）名、一般入試 14（昨年 23）名、大学入試センター試験利用 12（昨年 20）名と、後半の試験で歩留まりが昨年ほどではなく、昨年より 3 名少ない 70 名に留まったが、それでも入学定員の 156%の確保となった。

両学科を比較すると、昨年は英語観光学科は後半の日程を中心に、心理こども学科は前半の日程を中心に入学生を確保していたが、今年は学生確保において、両学科とも前半と後半のバランスがよかつた。

しかし、英語観光学科は 70 名と定員の 1.56 倍であったのに対し、心理こども学科は 37 名で定員に達せず、充足率 74% であった。この傾向はこの 4 年間続いている。心理こども学科の学生募集について具体的対策が求められる時期に来ていると思われる。

大学入試センター試験利用Ⅰ期で 3 教科 3 科目型を設置したが、英語観光学科で 23 名中 5 名、心理こども学科で 10 名中 4 名が 3 教科 3 科目型で受験しており、一定の成果があつたと考える。

入学定員確保の一因として、大学通信で行う全国調査で今年も高い評価をいただいたことが挙げられる。全国の高等学校の進路指導教諭が評価する小規模だが評価できる私立女子大学：3 年連続近畿女子大学第 1 位、保育士実就職率近畿：第 1 位（全国大学第 5 位）、面倒見がよい女子大学近畿第 3 位（全国女子大学第 11 位）などの好評価を頂いている（資料 3）。このような評価を今後とも維持していくべく、教務委員会や学生委員会、キャリアセンターなどとの連携を図っていきたい。

A 【改善策】

心理こども学科が定員を確保できていないのは、保育・教育関係の志願者が全国的に減少していることが最大の要因であろう。これに対して、心理こども学科、そして大学全体で対策を考えいかねばならない。アドミッションセンターとしては、心理こども学科は A0 型入試や推薦入試などの早めの入試日程で受験生が確保されているので、早めに受験生にアプローチするよう心がけることが必要である。

一方、英語観光学科は大きく定員を超え、最後の大学入試センター試験利用Ⅲ期と公募 D では合格者を絞ることも検討するほどであった。入学者を大学が選べる状況になったことは好ましいとも言えるが、それより早い入試日程での受験生よりも優秀であると考えられる後半の試験での受験生を不合格にせざるを得ない可能性があったことは非常に残念である。後半の試験でどれくらいの入学生が確保できる定かでない状況の A0 型や公募推薦 A～C 日程で入学者を絞ることは非常に難しく、悩ましいことではあるが、来年度は対応策を検討したい。

成績優秀者奨学金該当者（一般前期 A・大学入試センター試験利用Ⅰ期）は、各日程各学科 1 名ずつという制限を今年度より撤廃することとなり、今年は 2 名の入学者があつた。

広報媒体については、2019 年 4 月実施の新入生アンケートより、新入生たちが本学を選択した際の最初のきっかけを具体的に探ることができないかという考え方から、アンケート内容を改訂し、かつ提出時に簡単な聞き取りを実施することで、重点的に広報すべきポイントを絞り込もうと検討している。それにより効率的、効果的な学生募集・広報を実

現していきたい。

また、近年、高校生はパソコンから離れ、個人のスマートフォンで様々な情報を収集するようになった。特に SNS は、検索エンジン（Yahoo や Google）なども使用せず、SNS の中でキーワード検索し、情報を得るようになった時代に、溢れる情報の中、SNS で本学をアピールすることが HP 閲覧のきっかけになることも増えている。Twitter や Instagram で本学の魅力や入試情報、オープンキャンパス情報を発信することも少なからず誘導効果を發揮するとして、2018 年度より力を入れている。

WEB 出願も一般入試とセンター試験利用入試で始めたが、簡単に出願できるということで志願者増につながったと考える。

10. 宗教委員会

P 【目標】

本学の建学の精神であるキリスト教的価値観の学生の理解を深める。

D 【現状説明】

上記の目標達成を客観的に判断するために、2014(平成 26)年度から学生に対し、キリスト教精神の理解度を尋ねるアンケートを各キリスト教研修内においてアンケートを実施している。2019(令和元)年度までの各学年の研修内容は次の通りである。

1年次：【新入生オリエンテーション 2】（大塚国際美術館）

絵画等を通してキリスト教の世界に触れる。

2年次：【キリスト教研修 I】（カトリック夙川教会）

本学の保護者である聖母マリアについて、講話と音楽を通して学ぶ。

(2019(令和元)年講師のみ交代)

3年次：【キリスト教研修 II】（神戸布引ハーブ園 森のホール）

本学のもう一人の保護者であるアシジの聖フランシスコについて、講話と DVD 鑑賞を通じて学ぶ。(2018(平成 30)年度より、講話と「自分はどう役に立てるか・自分の役割」についてのワークの実施に改編)

4年次：【4年次研修】（兵庫県立淡路夢舞台国際会議場/ウェスティンホテル淡路）

講話（「女性の生き方」－いのち・生きる・いつくしむ－）と講話に基づくグループ・ディスカッション及び全体発表を通して自分自身を見つめ直す。(2019(令和元)年度より、講話は「与えられたいのちを生きる－喪失から生きる意味を考える－」に改編)

本年度は各研修会について、(1)前年度との出席率の比較、(2)前年度とのアンケート結果の比較を通じて分析する。また、(3)研修会以外の活動の実施について報告を行う。

(1)各研修会についての前年度との出席率の比較

表1に2018(平成30)年度と2019(令和元)年度のキリスト教研修への学年別出席率を示す。

表1) 2018 年度と 2019 年度の学年別研修出席率

	1年次生	2年次生	3年次生	4年次生
2018 年	94.8%	85.9%	95.4%	87.7%
2019 年	98.2%	74.2%	89.2%	96.6%

表1より、1年次生、4年次生においては、出席率が改善している一方で、2年次生、3年次生で出席率の低下が見られた。2年次生については、心理こども学科の出席率が94.3%だったのに対し、英語観光学科の出席率は60.4%と低く、3年次生においても、心理こども学科の出席率が97.1%だったのに対し、英語観光学科の出席率は83.8%であった。この2学年においては、英語観光学科の出席率の低さが学年全体に影響しているのが明らかとなった。

(2)各研修会についてのアンケート結果の比較

①各学年ごとの研修会についてのアンケート結果の比較

表2)「研修は有意義（4年次のみ充実）」に対し、「大変そう思う」「そう思う」の回答率

年度	1年次生	2年次生	3年次生	4年次生
2018年	97.7%	91.1%	100.0%	98.3%
2019年	97.0%	94.8%	88.6%	95.1%

表2より、概ね9割を超える学生が、研修は有意義、あるいは充実していた、に対し、「そう思う」と回答していた。2年次は回答率が向上、3年次生の研修のみ、前年度からの「研修は有意義」とする回答率の低下が目立った。

表3)「キリスト教への理解深まったか」に対し、「大変そう思う」「そう思う」の回答率

年度	1年次生	2年次生	3年次生	4年次生
2018年	92.0%	89.5%	97.5%	95.1%
2019年	90.9%	93.3%	84.9%	93.9%

表3より、8割半から9割の学生が、キリスト教への理解が深まった、に対し、「そう思う」と回答していた。ここでも、2年次は回答率が向上、3年次生の研修のみ、前年度からの「理解が深まった」とする回答率が大きく低下していた。

②4年間を通じての理解度の変化について

表4) キリスト教的精神に対する理解度の深まりを尋ねるアンケート項目

2年次) この研修を終えて、1年次生のときよりもキリスト教の精神に対する理解が深まった。
3年次) この研修を終えて、2年次生のときよりもキリスト教の精神に対する理解が深まった。
4年次) これまでの研修を通してキリスト教的精神に対する理解が深まった。

表5) キリスト教的精神に対する理解度の深まりを尋ねるアンケート結果の総時比較

		大変そう思う	そう思う	あまり思わない	思わない
年	年次	理解度(前年度)			
2017年	2年次	54.5% (21.1%)	42.6% (61.4%)	2.9% (10.5%)	0% (7.0%)
2018年	3年次	40.0% (23.2%)	57.5% (51.8%)	2.5% (25.0%)	0% (0%)
2019年	4年次	34.6% (29.5%)	59.3% (65.6%)	4.9% (3.3%)	1.2% (1.6%)

表5より、2年次生の研修で、「思わない」と回答した学生が減少し、「大変そう思う」と回答した率が、2倍以上となった。同様に、3年次研修においても、「あまり思わない」が十分の一に減少し、「大変そう思う」が倍近く増加した。4年次研修においては、「思わない」の回答が増加したが、一方で「大変そう思う」と回答した学生の割合もまた増加している。

表6) 特に印象に残っている研修

卒業年度	1年次生	2年次生	3年次生	4年次生
2018年度卒	24.2%	3.4%	3.4%	69.0%
2019年度卒	27.5%	1.3%	12.5%	58.7%

表6より、昨年度の卒業生よりも、3年次生の研修を挙げた学生が4倍近く増加していた。

(3) その他の活動についての報告

先述したキリスト教研修や、クリスマスミサ、クリスマスキャロルといった年中行事以外に、2019(令和元)年度は、日常場面に溶け込んだ、キリスト教的精神に触れる機会を設ける意図で、「ミッション・シネマの会」を7月に2回、1月に1回実

施した。7月には、『マザー・テレサの遺言』を視聴し、11名の学生が参加、1月には『置かれた場所に咲くということ（シスター渡辺和子）』を視聴し、5名の学生が参加した。また、海星協力金の一部を、「サンタ募金」として、神戸市灘区の児童養護施設の子ども達へのクリスマスプレゼントとして利用することにし、それを届けるサンタガールズを募集した。8名の学生が集まり、3か所の施設から大変喜んでいただいた。

C 【点検・評価】

(1) 各研修会についての前年度との出席率の比較より、1、4年次生では改善されているが、2、3年次生では出席率の低下、特に英語観光学科の学生の参加率の低さが目立っていた。ゼミでの事前アナウンスが徹底されていなかった可能性、また、卒業単位に関係がないから行かなくてもよいのでは、というような風潮が、上級生他から伝わった可能性が考えられる。

(2) 各研修会についてのアンケート結果の比較

①各学年ごとの研修会についてのアンケート結果の比較

本年度の研修について、有意義、充実、と、ほぼ9割の学生が評価していたが、3年次生の研修のみ、前年比1割以上低下していた。これに関しては、アンケート配布のタイミングが早すぎた、ということがその原因として挙げられる。3年次の研修は、昼食を挟んで、午前に講話、午後にワークを実施している。ワークの内容を理解して、初めて研修全体の意図がわかるのだが、本年度は、昼食後戻ってきた学生にアンケートを他の資料と一緒に同時に配布してしまった。多くの学生が、ワークを実施する前にアンケートに回答しており、それに気が付いた時には既に手遅れであった。最後の振り返りや、ワークの感想は、概ね好評であったため、タイミングが合っていれば、ここまで数値の落ち込みにはならなかつたと考えている。これは、「キリスト教への理解深まったか」に対する、「そう思う」の回答率についても同様に言えることである。

②4年間を通じての理解度の変化について

キリスト教的精神に対する理解度の深まりを尋ねるアンケートの結果、回答率の前年比より、2、3年次生の研修では、「思わない」の回答率が大きく減少し、2、4年次生の研修では、「大変そう思う」の回答率が増加していた。これらの結果より、年々理解の深まりを感じた学生が全般に増加したと考える。

また、4年次研修時にこれまでを振り返り、特に印象に残っている研修についての回答で、2019(令和元)年度卒業生にとって、その前の年の卒業生よりも、3年次の研修が印象に残っていると答えた学生が4倍増加していた。昨年度内容を大幅に改編したことがこのようなところでも数値で示された結果となった。

(3) その他の活動についての報告

「ミッション・シネマの会」、「サンタ募金」を実施した結果、予想以上の学生の参加が得られた。

A 【改善策】

まず、出席率の改善のために、本年度は、研修欠席の学生に、学長面談を実施した。ほぼ全員が面談に参加した。来年度は各ゼミでの研修のアナウンス時に、欠席者への課題や学長面談の事も情報として伝えることとする。本年度は研修の日程が、直前にゼミが無く、長い連休が明けてすぐの金曜日だったことも影響したようであった。来年度は連休明けの次の週の金曜日であるため、充分な告知の時間を確保したい。また、2021(令和3)年度からはキリスト教研修の単位化を実施予定である。これによって参加意欲の向上を目指す。

次に、キリスト教的精神の理解については、2年連続で9割前後の高い評価を得られていることから、内容の検討を重ねつつも、引き続き、この形式での研修を実施することとする。

中でも、1年次生の研修では、急きょ美術館ガイドが付かないこととなり、尾崎教授に解説をお願いすることとなった。また、引率の教員による絵画説明も実施していただき、先生方のご協力を得なければ、研修実施が出来ない状況であった。それでも学生たちからは、9割以上が有意義であったという回答が得られ、先生方のお陰で前年とも遜色ない研修実施となった。

また、2、4年次生についても、本年度より講師の交代があったが、どちらも、講演について、学生からの高い評価を得られた。自由記述の分析より、学生に受け入れられやすい形を今後も模索していきたい。3年次生においては、アンケート配布のタイミングに注意し、絵本の朗読や、合唱など、学生の主体的な研修への参加を促していきたい。

最後に、その他の活動について、本年度は委員長が単独で実施内容を決めていたが、これも委員会に協議しながら決定していくこととする。

11. 図書委員会

P 【目標】基準8-③

読書の推進を図るとともに、図書・資料の利用をサポートする学修支援を行う。

D 【現状説明】

(1) 読書推進について

- ① 文庫本を中心に新着図書の配置や提示方法を工夫し、読書推進を図った。
- ② 企画「ピッタリの本を見つけたい！そんな願いを星がかなえます」を実施し、チャートシートを配布することにより、図書への興味を喚起するようにした。10月14日から12月24日の実施期間中、14件の参加があり、提案した図書39冊のうち8冊の貸出があった。なお、検索に時間を取るよりも図書との出会いに重点を置くため、手順からOPAC検索を外すよう変更した。

(2) 図書・資料の利用をサポートする学修支援について

- ① イベント「英語多読について語り合おう！」を実施し、利用方法についてサポートを行った。5月7日から7月24日の間に7回開催し、計4名が参加した。「多読図書の読み方が分かったので、その方法で早く読みたいと思った」「自分でも分からなかった自分の弱いところを見つけてくれて、お薦めのレベルを紹介してくれたのがよかったです」等のコメントがあった。
- ② 企画「英語多読の山登り！」を実施した。英語多読について、館内と館外の広報を強化するとともに、学生の多読レベルに応じて読語数を増やすようサポートを行った。10月1日から1月31日までに計11名が参加した。
- ③ イベント「絵本を語るブックトーク」を実施した。保育実習を控えた学生を対象に、0歳児から6歳児向けの絵本を紹介することで利用促進を図った。6月4日から20日の間に4回、10月29日・30日に3回、計7回実施したところ、7名の学生が参加し「実習に役立てたい」等のコメントがあった。紹介した図書について3名から4冊の貸出があり、2名から館内利用希望が1冊あった。
- ④ 季節に応じて、「雨の季節の絵本」「夏の季節の絵本」「秋の季節の絵本」「冬の季節の絵本」「春を待つ絵本」を展示し、保育実習・幼稚園教育実習に活用できるようにした。
- ⑤ 保育・教育（幼稚園・小学校）に関連性の高い書架コーナーを整備し、保育士・教員を目指す学生の利用をサポートした。

C 【点検・評価】

(1) 読書推進について

- ① 学生の主な読書対象である文庫本の貸出件数がグラフ(a)「文庫コーナー貸出件数推移」のとおり増加し、1月31日までの学生の貸出件数は229冊(前年度108冊)となった。
- ② 読書推進企画「ピッタリの本を見つけたい！そんな願いを星がかなえます」では、OPAC検索の手順を外す前は1件の参加であったが、外した後の11月29日以降は参加が増えて13件、計14件になった。

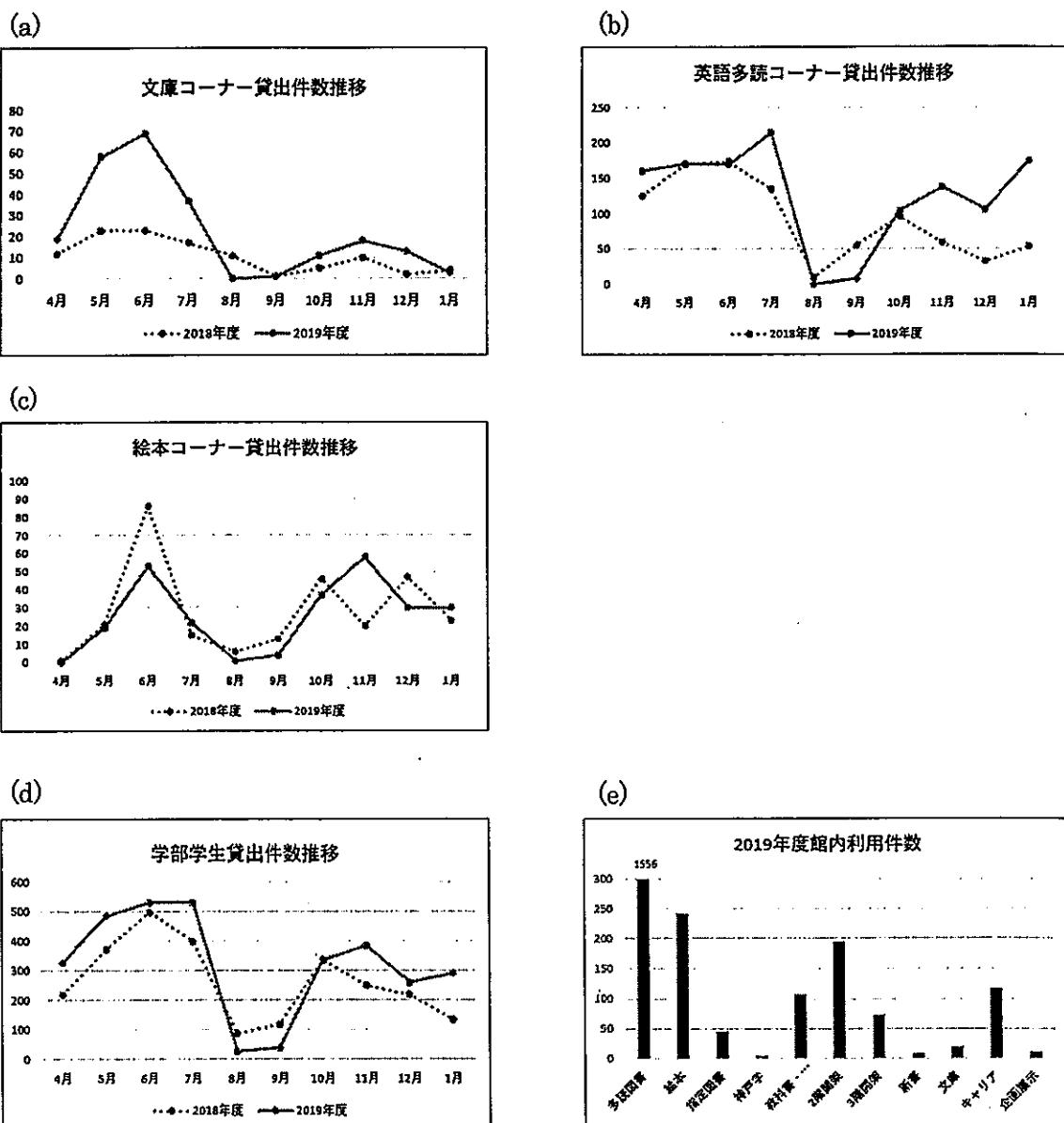
(2) 図書・資料の利用をサポートする学修支援について

- ① 英語多読図書の月別貸出件数は、グラフ(b)「英語多読コーナー貸出件数推移」のとおりである。2018(平成30)年度と比較すると、7月と10月から1月が好調で、1月31日までの学生の貸出件数は累計1,248冊(前年度910冊)となった。

② 絵本の貸出件数は、グラフ(c)「絵本コーナー貸出件数推移」のとおりである。2018(平成30)年度と比較すると、保育実習がある6月は少ない傾向にあったが、11月には2.9倍となった。絵本を語るブックトークイベントや季節に応じた絵本を紹介する展示も、絵本利用に役立てることができた。

③ 2019(令和元)年度の学生の館外貸出件数はグラフ(d)のとおり推移し、4月1日から1月31日までに3,208冊(前年度2,628冊、前年度比122%)となった。(参考:4月1日学生数は2018(平成30)年度354名、2019(令和元)年度382名で前年度比108%)

2019(令和元)年度の館内利用件数については(e)のとおりである。1月31日までの累計は2,135冊うち英語観光学科の学生が多く利用する英語多読図書が1,556冊、心理こども学科の学生が多く利用する絵本が242冊であった。なお、2階開架図書は196冊、3階開架図書は74冊、キャリアコーナーの図書は117冊の利用があった。



A【改善策】

<効果が上がっている事項>

(1) 読書の推進について

- ① 文庫本等を中心とした新着図書の提示や関連サービスの強化の結果、文庫本の学生の貸出件数が前年度比で2倍以上になった。
- ② 企画「ピッタリの本を見つけたい！そんな願いを星がかなえます」では、学生の意欲を高めるためにOPAC検索を外す等手順を簡素化したところ、参加者数が増加した。

(2) 図書・資料の利用をサポートする学修支援について

- ① イベント「英語多読について語り合おう！」や、企画「英語多読の山登り！」では、英語多読の取り組みの意欲につながり、学生の貸出件数が増加した。
- ② イベント「絵本を語るブックトーク」や季節に応じた絵本の展示は、保育・教育実習の際の学生の絵本活用の動機づけとなり、貸出件数や館内利用件数が増加した。

<改善すべき事項>

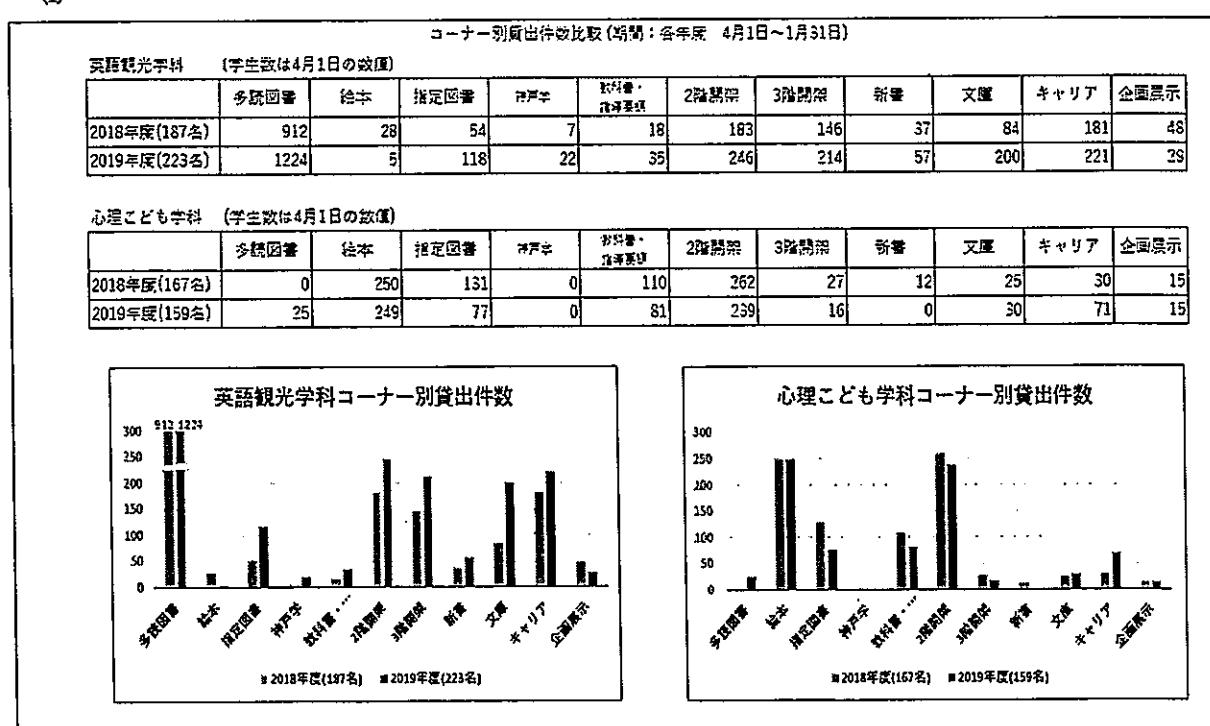
(1) 読書の推進について

「コーナー別貸出件数比較」のグラフおよび表(f)のとおり、企画展示コーナーからの貸出件数が少ないので、貸出につながるよう企画展示を検討する。

(2) 図書・資料の利用をサポートする学修支援について

- ① 「英語多読の山登り！」は内容を強化し、来年度も継続する。
- ② 「絵本を語るブックトーク」は、実施7回のうち学生の参加があったのは1回であった。来年度は発信の仕方や実施方法を再考し、学修支援の機会となる取り組みを実施する。

(f)



12. 生涯教育委員会 地域交流委員会

P 【目標】

- 基準 9-① 大学の教育研究成果を適切に社会に還元するための社会連携・社会貢献に関する方針を明示する。
- 基準 9-② 本学の社会連携・社会貢献において多方面の学外組織や団体と連携を図りつつ、教育研究及び学修成果を社会に還元する。
- 基準 9-③ 社会連携・社会貢献の適切性について定期的に点検・評価を行い、その結果をもとに改善・向上を行う。

D 【現状説明】

基準 9-①

大学の理念・目的、学部・各学科の目的等を踏まえ、本学の教職員による教育研究活動の成果について、それらを適切に社会に還元するための「社会連携・社会貢献に関する基本方針」を定めている。その方針をより広く明示するため、「社会連携・社会貢献に関する基本方針」として、大学ホームページにおいて社会に公表した。

(「地域・社会の皆様へ」 https://www.kaisei.ac.jp/for_visitors)

基準 9-②

学外組織や団体と連携をより明確に把握するため、連携先項目を加えた社会連携・社会貢献報告書「地域交流貢献報告書」の提出を義務付けた。連携組織・団体の分類を 1. 行政（兵庫県・神戸市・その他）・2. NPO・3. 教育機関・4. 一般法人・5. 一般団体・6. 地域コミュニティ・7. メディア（広報）・8. その他とし、報告は、春学期・秋学期の 2 度の集計を踏まえ、教授会で発表した。

基準 9-③

本学における公開講座は、2011(平成 13)年度からは、聴講の層を広げる意味から、大学祭当日に開催するという形で毎年講座を開講している。本学の研究を地域に還元することの必要性が確認され、本学非常勤講師が「身体が心が嬉しくなるウエルネス」と題し講演を行った。講座終了時にはアンケートを取り、委員会で点検・評価を行い、次回の改善・向上に向けた話し合いを行ったうえで、教授会にて報告を行い、より満足度の高い公開講座を目指した。

また、本学では、大学教育の地域還元という位置づけで、2007(平成 9)年度から生涯学習講座を開講している。講座開設にあたり、本学の語学教育の伝統と各学科の特性を生かした講座を開講することを目標とした。語学講座として、英会話コース(2 講座)、

フランス語会話コース（2講座）、実践中国語コース（1講座）を開講し、また、観光関連講座として、文学講座（2講座）、ハワイ文化講座（1講座）を開講し、地域の要望に応えた。社会連携・社会貢献の適切性について明確にするために、事後アンケートを行い、その集計結果を委員会において検討した。通年にわたる語学講座では、中間アンケートも実施し、その結果も委員会において検討した。要望・感想等の項目は特に重視し、担当講師にもその結果を配布し、必要に応じた改善を依頼し、受講生から講師への希望が伝達できるようにした。

C 【点検・評価】

教員・学生の「地域交流貢献報告書」の集計結果から、教員の活動としては、神戸市学習支援センター大学連携講座や、明石市教育委員会などの依頼に応え、特に神戸市、明石市、宝塚市と継続的に連携し、研究成果を広く還元していることがわかった。

さらに、学生の地域交流貢献も、多く神戸市で成果を上げていることがわかった。学生が直接現場を体験する英語観光学科の「キッズイングリッシュ（神戸市）」や地域の子育て支援を行う心理こども学科の「海星子育てひろば（学内）」・「赤ちゃんひろば（神戸市灘区）」・「キッズフェスティバル（大学コンソーシアムひょうご）」は、大学や学部・学科の特色を生かした取り組みとして特にその効果をあげている。また、「灘区総合芸術祭」は、学生の発表を通じた市民・区民との交流の場で、大学公認のクラブ団体が参加した。

本学主催の公開講座は、昨年度増の受講生を集め、満足度81%の成果であった。今後も、大学の特徴を活かした講座を企画していく。継続率は、40%と高く、受講生からの講座内容についてのアンケート結果からも、高い評価が得られていることがわかる。

また、語学講座を中心とする生涯学習講座の定員充足率は、2018(平成30)年度で72.8%、2019(令和元)年度で81.9%とさらに高くなった。また、継続率も2018(平成30)年度で55.0%、2019(令和元)年度で64.1%と高い。受講生からの講座内容についてのアンケート結果からも、高い評価が得られていることがわかる。

A 【改善策】

教員の社会連携・社会貢献を成果あるものにするためには、より一層の環境整備が求められる。社会貢献には多くの時間と費用がかかるが、人員と経費のどちらもが十分に確保できない状態のため、専任教職員のより積極的な参加を求めることが難しい。そのため、非常勤教員に多く依頼を行う現状となっている。この点の改善のため、社会連携・社会貢献の重要性を広報し、教授会での報告を強化していく。さらに、環境整備についても提案をしていく。

大学の地域への開放も課題の一つである。そのためにまず、生涯学習講座の開講科目を増やすことで、図書館利用も含めた大学の地域への開放を行っていきたい。その中で、学科の特性を生かした社会貢献を進めていくため、来年度は両学科の特性を活かした生涯学習講座の開講も増やしていく。

13. 英語観光学科

P 【目標】基準4-④

自他の文化に対する学生の理解を深化させ、研修やフィールドワーク等の具体的な実践に繋げる。また、各自が批判的精神（critical mind）をもって、そうした実践の再吟味・分析ができるように、公表及び報告の機会を複数提供する。さらに、発表者のみならず、発表の受容者側である学生も、発表者が実践で得た成果・認識を主体的に共有できるようにする。

D 【現状説明】

3年次観光分野演習クラスのフィールドワークとして、(1)外国人観光客意識調査、(2)古民家再生プロジェクトの二つを実施、言語分野演習クラスでは、(3)合唱曲の英語歌詞翻訳を行った。また国際交流の一環で、(4)フランス・サンローラン学園の生徒との交流の機会があった。(1)(2)については、調査した地域の魅力を兵庫県公式観光サイト『Hyogo！ナビ』で発信、また(1)(2)(4)については、12月に学科主催で行った「第9回 KAISEI English and Tourism Festival」において、参加学生が発表を行った。

C 【点検・評価】

(1)外国人観光客意識調査

姫路城（兵庫県）とその近辺で、外国人観光客に対してアンケート調査を行った。日本訪問の目的、旅程（滞在日数、費用予算、利用航空会社、宿泊場所等）、日本の何に期待しているか、日本の印象等を英語で聞き取ることで、日本を訪れる観光客の意識について学び、異文化理解に繋げることができた。

兵庫県下の観光名所や文化財などを学生が撮影し、インターネットサイトへ投稿することによって兵庫県観光プロモーションを行う、兵庫県公式観光サイト『Hyogo！ナビ』の事業に参加し、調査内容をもとに「姫路の魅力を女子的目線で再発信！」という記事を掲載している。また、英語観光学科全学年対象の行事において調査内容に関する発表を行った。

(2)古民家再生プロジェクト

経済的側面から地方の資源を活かし、地方活性化を図る方法の一つとして観光がある。ホスピタリティ産業が地域で担う役割は何か、現場では何を大切にしているかなど、観光立国をめざす日本の最重要課題の一つである「地域再生」の実態を理解することを目的にフィールドワークに取り組んだ。

ならまち（奈良市）や丹波篠山市（兵庫県）の古民家再生ホテルNIPPONIAを訪問し、古民家をリノベーションして飲食店や店舗に生かす取り組みについて学び、観光

関連事業者や観光客へのヒアリングを通して、観光による地域振興の課題や展望について考えた。なお、外国人観光客へのアンケートは英語・韓国語・中国語・日本語で用意した。

フィールドワークを通して、対象地域の観光事情や観光客の意識について学ぶだけでなく、実践しながら視野を広げ、行動力を磨くことができた、と参加学生が言う。調査内容及び分析結果は、英語観光学科全学年対象の行事において発表を行った。

『Hyogo！ナビ』サイト内に掲載許諾を得た記事は以下の二点である。

- ・「丹波篠山の城下町を探索♪ほぼ食べ歩き(笑)」
- ・「城下町に溶け込むように泊まる、丹波篠山の新しく懐かしい旅の愉しみ方
～城下町に溶け込むように泊まる。町全体をホテルとする NIPPONIA～」

(3)合唱曲の英語歌詞翻訳

国内外のさまざまな地で「復興の歌」として歌い継がれている「しあわせ運べるように」(白井真 作詞・作曲)の歌詞の英語版翻訳に取り組んだ。阪神・淡路大震災から25年となる2020(令和2)年1月開催の災害復興支援コンサート「PRAY FROM KOBE 明日につなげるコンサート」の参加者が演奏するためにと依頼されたものである。メロディに合わせて歌う歌詞の英語版翻訳であるため、日本語と英語との言語的・文化的な違い、特に英語音やリズムの特徴と原曲の歌詞の内容・メロディとを考えながら取り組み、その記録を小冊子にまとめた。

コンサート当日は、作曲者の白井氏が列席する会場で香港の男声合唱団により英語版が初演された後で、会場全体で合唱され、その様子は朝日新聞(2020(令和2)年1月20日朝刊)にも取り上げられた。

(4)フランス・サンローラン学園の生徒との交流

10月末に、フランス・サンローラン学園の生徒6名と引率教員1名が、6日間の日程で本学を訪問した。本学との協定を視野に入れての視察を兼ねた訪問で、授業見学や大学祭見学の他、本学学生との交流会や姫路遠足に参加した。本学学生には、昼休みや放課後の交流会の参加や、大学とホームステイ先の最寄り駅間や姫路フィールドトリップの帯同ボランティアを募り、多くの学生が参加した。

2日目に実施した歓迎会においては、本学学生が積極的に交流するかを心配していたが、想定以上の数の学生が参加し、学生たちとサンローラン生徒とが英語で共通話題について話し、歌を歌い、時間を延長するほどであった。彼女たちが神戸を発つまでの間に学生たちは交流を深め、その後もオンラインで繋がっているようである。1週間の様子については、英語観光学科全学年対象の行事において発表を行った。

学生が、英語を使って異文化を感じ、自文化を伝える絶好の機会となった。協定については進めていきたいと考えている。

A 【改善策】

自由意思で参加した(4)は除き、授業の一環で行った(1)(2)(3)について共通してみられたのが、学生により課題に対して取り組む姿勢が異なる点である。外国語に対する得意・不得意の違いの他に、課題を見つけ出し、それをどのように解決すべきかを考える論理的思考のトレーニングが必要であると考えられる。

(

(

14. 心理こども学科

1. P【目標】基準4-④

学生の主体的参加を促す授業内容や授業方法を工夫する。授業アンケート等を通して学生の実態を把握し、さらなる改善を図る。

2. D【現状説明】

1年次生に取得したい免許状や資格についてアンケートを実施（回答35名）したところ、保育士23人（65.7%）、幼稚園教諭28人（80%）、小学校教諭10人（28.6%）、認定心理士24人（68.6%）、公認心理師1人（2.8%）等であった。<2019年4月18日実施、複数回答有り>

目指す理由については、「子どもに関わる仕事に就きたいから」「小さい子どもが好きだから」（幼保希望）、「勉強が楽しいと思える授業づくりできる教師になりたい」（小学校希望）等の記述があった。

子どもが好きだから、子どもに関わる仕事に就きたいから、と理由付けするケースが多いが、「先生」になるまでの学びの道は平たんではない。しかし、「先生」として現場で活躍している卒業生の在学時代を振り返ると、共通点がある。将来の夢を叶えるために、真摯に4年間学び続け、人間力を鍛えたことである。

このような現状を踏まえ、子どもたちや保護者に信頼される「先生」を育成する大学での学びを検証するため、今年度も授業アンケートを実施した。15回の授業の中間にわたりアンケート結果をもとに授業改善を行い、授業後期の結果と比較し、次年度に向けての改善策を考察した。

3. C【点検・評価】

9名の学科教員が授業評価アンケートを実施したのは下記のとおり、1年次2科目、2年次4科目、3年次3科目である。

- (1) 1年次春学期「科目A」担当A
- (2) 1年次春学期「科目B」担当B
- (3) 2年次春学期「科目C」担当C
- (4) 2年次秋学期「科目D」担当D
- (5) 2年次秋学期「科目E」担当E
- (6) 2年次秋学期「科目F」担当F
- (7) 3年次春学期「科目G」担当G
- (8) 3年次春学期「科目H」担当H
- (9) 3年次春学期「科目I」担当I

(1) 1年次春学期「科目A」担当A

D【現状説明】

4月18日実施の進路等に関するアンケートによると、35名中34名の学生が保育士・認定心理士の資格や教員の免許状取得を挙げていた。

希望する職種に就くために大学で修得したいこととして、「日本語表現」に関連する内容では、①コミュニケーション能力、②正しい言葉の使い方、③字を丁寧に書く、④国語力・文章力、⑤読み聞かせ等が記載されていた。

「科目A」の授業に引き付ける手立てとして、昨年度同様「美しい日本語」の学びとして、「絵本紹介」を実施した。敬語を修得するために、DVDを活用したり、事例を多く取り上げたりした。

また、主体的に参加する意識をもたせるために、ペアワークや発表、自分の考えを書く時間を設定した。

なお、外国人留学生や授業を欠席した希望者には個別指導の時間を取り、授業内容の理解を図った。

C【点検・評価】

<アンケートの実施>

6月6日と7月25日に、授業アンケートを実施した。結果は次のとおりである。

アンケート項目	1回目 32名 (6月6日)	2回目 36名 (7月25日)
1. 話し方や説明の仕方		
(1) わかりやすい	24 (75.0%)	25 (69.4%)
(2) どちらかというと、わかりやすい	6 (18.8%)	11 (30.6%)
(3) どちらかというと、わかりにくい	2 (6.2%)	0 (0%)
(4) わかりにくい	0 (0%)	0 (0%)
2. パワーポイントのスライドの文字の大きさ、スライドの速さ		
(1) これくらいの大きさや速さでよい	19 (59.4%)	27 (75.0%)
(2) どちらかというと、これくらいの大きさや速さでよい	5 (15.6%)	7 (19.6%)
(3)-1 文字をもっと大きくしてほしい	0 (0%)	0 (0%)
(3)-2 もっとゆっくり進めてほしい	7 (21.9%)	1 (2.7%)
(4) 文字を大きくし、スライドをゆっくり進めてほしい	1 (3.1%)	1 (2.7%)
3. 授業の進め方		
(1) これくらいの速さでよい	24 (75.0%)	22 (61.1%)
(2) どちらかというと、これくらいの速さでよい	7 (21.9%)	11 (30.6%)
(3) どちらかというと、もっとゆっくり進めてほしい	1 (3.1%)	2 (5.6%)
(4) もっとゆっくり進めてほしい	0 (0%)	1 (2.7%)
4. 授業の内容①		
(1) 今後、とても役に立つと思う	26 (81.3%)	26 (72.3%)
(2) 今後、役に立つと思う	5 (15.6%)	9 (25.0%)
(3) 今後、少し役に立つと思う	1 (3.1%)	1 (2.7%)
(4) 今後、役に立つとは思わない	0 (0%)	0 (0%)
5. 授業の内容②		
(1) とても関心を持つことができる内容である	19 (59.4%)	25 (69.4%)
(2) どちらかというと、関心を持つことができる内容である	12 (37.5%)	11 (30.6%)
(3) どちらかというと、関心を持つことができない内容である	0 (0%)	0 (0%)
(4) 関心を持つことができない内容である	1 (3.1%)	0 (0%)
6. 印象に残った授業や要望（下記）		

<1回目のアンケートより「印象に残った授業や要望」>

①今までの授業で印象に残っていること

- ・発声トレーニング(10)(毎回、百人一首が入っていたこと。早口言葉の練習)
- ・自己紹介(7)(自己紹介の原稿を書いたこと。前で話すことの難しさを知った)
- ・敬語(7)(使い方が難しい。将来役に立つ。敬語が苦手だったが好きになった)
- ・絵本紹介(6)(深くて毎回泣きそうになる)
- ・字の練習(3)(正しい鉛筆の持ち方や筆順を知った)
- ・言葉の使い方(2)(間違って覚えていたことがわかった)

② 要望

- ・字をきれいに書くコツを教えてほしい。
- ・プリントに書き込めないときがあるので、もう少しゆっくり進めてほしい。

③ 今後、頑張りたいこと

- ・敬語を覚える・正しく使う(14)
- ・字をきれいに書く(8)
- ・言葉遣い(3)
- ・しっかりとメモを取りながら授業を受けたい。

<2回目のアンケート結果より「印象に残った授業や要望」>

① 印象に残った授業

⑦ 普段、発声トレーニングの習慣がないので、授業に取り入れるのはよいことだと思う。小筆を使ってひらがなや漢字を書くことは、シャープペンシルで書くより難しいということがわかった。小筆での字の練習を取り入れたことで、少しずつだが字のバランスがよくなったように思う。

⑧ 一番印象に残っているのは自己紹介の発表である。今まで知っている人の前で発表することはあったが、大学生になり全く知らない人の前での発表だったので緊張した。普段からもっと話す練習をしないといけないと思った。

⑨ 敬語表現で、普段間違った使い方をしていることに気付くことができた。筆ペンを使って字を書いたことがなかったので新鮮だった。敬語の使い方や話し方、字のきれいさ等相手が私の印象を決めるものになるので、丁寧に正しく使うようにしていきたい。

⑩ 絵本紹介と敬語（ビジネス用語）。この前、母とカフェに行ったとき『はじめてのおつかい』を見つけた。先生の言っていた＜作者の遊び心＞を母と一緒に見て、二人して「知らなかったね」と話をした。妹にもそのことを言うと、すごく嬉しそうに「友達にも話してあげる」と言っていたので、私も自分で新しい発見をしていこうと思った。2年次になれば実習もあるので、この授業で習ったことを少しずつでも身に付けておきたい。

(1) 効果が上がっている事項

- ① アンケート項目1～5で、(1)(2)を合わせると、1回目の平均は91.7%。2回目は96.7%であった。上がっている項目が4項目あり、1と5は100%であった。下がったのは「3. 授業の進め方」であった。
- ② 2回目は、(1)(2)を合わせて100%が2項目あるなど、評価は良好であった。特に「授業の内容①②」から、「役に立ち」「関心のある授業内容」であったと評価できる。
- ③ 2回目の「印象に残った授業」⑦⑧⑨の記述から、授業内容の成果が表れていると評価できる。「絵本紹介」では今年度は、生きる・障害・児童労働・母と子・昔話等をテーマに10冊の絵本を紹介した。特に、マーガレット・ワイス・ブラウン作 内田也哉子訳『たいせつなこと』(フレーベル館)は、最後の一文「でも あなたにとって たいせつなのは あなたが あなたであること」が心に響く作品である。

(2) 改善すべき事項

- ① 発声トレーニングや絵本紹介も含めて、90分の授業方法を検証し、さらに授業内容を充実させたい。
- ② 敬語指導は講義と練習問題が中心になるので、学生が活動する授業形態を工夫し、敬語を使って話す力を付ける必要がある。
- ③ 授業初回と最終回に同じ日本語テストを実施し、2回のテストを比較することを6年間続けているが、テスト問題の見直しを図りたい。

A [改善策]

- ① 授業評価アンケートを来年度も実施し、授業方法や授業内容の充実を図る。
- ② 敬語指導の授業形態を工夫する。
- ③ 日本語テストの問題を再考する。

(2) 1年次春学期「科目B」担当B

C[点検・評価]

アンケートの結果は次のとおりである。

- ① 第1回目のアンケート結果（回答者数50名）2019年6月7日実施
 - ⑦ 授業の理解度は（1. わかった（52%）2. まあまあわかる（46%）3. わかりにくい（2%）） *分かりにくい理由：内容が難しい
 - ① 授業の内容は（1. 満足（52%）2. 興味を持てた（46%）3. つまらない（2%）） *内容について、記述なし
 - ⑦ 授業の進め方は（1. ちょうどよい（94%）2. 速すぎる（4%）3. 遅すぎる（2%）） *進め方について：スライドを写すのに少し時間が足りない時がある
 - ⑨ 教材・資料等は（1. わかりやすい（44%）2. 問題ない（48%）3. 不適切（8%）） *不適切の理由：教科書が分かりづらい、パワーポイントの印刷がほしい、文字が多くて難しそう
 - ⑤ 授業中の環境は（1. 集中できる（46%）2. 問題ない（50%）3. 集中できない（4%）） *集中できない理由：一つ前の人があるさい、ゆるすぎる
 - ④ アンケート自由記述欄
 - ・席替えを希望 2名
 - ・進め方をゆっくりしてほしい 2名
 - ・ノートをとるのが大変、どこを書いているのかわからなくなる等 2名
 - ・内容が難しいのでテスト勉強が不安 3名
 - ・問題なく授業受けられている 11名
- ② 第2回目のアンケート結果（回答者数50名）2019年7月26日実施
 - ⑦ 授業の理解度は（1. わかった（46%）2. まあまあわかる（50%）3. わかりにくい（0%）4. 無回答（4%））
 - ① 授業の内容は（1. 満足（46%）2. 興味を持てた（50%）3. つまらない（0%）4. 無回答（4%））
 - ⑦ 授業の進め方は（1. ちょうどよい（90%）2. 速すぎる（6%）3. 遅すぎる（0%）4. 無回答（4%））
 - ⑨ 教材・資料等は（1. わかりやすい（54%）2. 問題ない（40%）3. 不適切（2%）4. 無回答（4%）） *不適切の理由：レジュメが欲しかった
 - ⑤ 授業中の環境は（1. 集中できる（50%）2. 問題ない（44%）3. 集中できない（2%）4. 無回答（4%））
 - ④ アンケート自由記述欄
 - ・難しかった 2名
 - ・初めて知れたことが多かった、興味を持てた 他 12名

(1) 効果が上がっている事項

2回のアンケートの結果を比較して、授業後半の「授業の理解度」「授業の内容」において、「分かりにくい」、「つまらない」という回答が0%になっていた。また、「教材・資料」に関しても、「不適切」とされた数値は8%（4名）から2%（1名）に減少しており、その1名に関しては、パワーポイントのレジュメが欲しかった、と回答している。そして、「授業の環境」に関して、「集中できない」と回答した学生は、4%から2%へと減少していた。席替えによって、多少は改善できたと考える。

(2) 改善すべき事項

「授業の進め方」に関し、進め方が早かった、と回答する学生が、4%から 6%へと増加していた。パワーポイントの送り方など、常に、進めてよいか学生に確認しながらではあったが、授業が 60 名程度の大きなクラスであったことや、早いと思っていても待ってほしいという意思表示ができない学生がいたかもしれないと考える。

A [改善策]

今回の調査から、「わかりにくい」等の評価をした学生に、どのようなところでそう思ったのかを記述してもらうようにした。教材を不適切と思った学生が、パワーポイントを配布してほしいと思っていることが分かり、今後の検討材料となった。今後もアンケートにはこのような記述のスペースを設けたい。

改善策に次の二つを挙げる。

① 学習の困難は、ノートの取り方に集中していたように思われる。ペースが速い、と感じるのも、原因は同じであると考える。「どこを書いたらよいのかわからないことがある」というような指摘もあった。そのため、ノートのために配布している資料を見直し、記入しやすいように作成し直すことを次年度は検討したい。パワーポイントのレジュメを配布することを希望する学生もいるが、配布したことで安心して、居眠りをしたり、私語が増えたりする可能性が高まるため、配布しない方針を変えるつもりはない。ノートの方で記入すべきポイントを絞って、学生が授業に集中できるように工夫したい。

② 環境調整のために、次年度も実際の学生の声を反映させながら座席の配置の工夫を実施したい。

また、これまで実施していたことの中で継続したいこととして、理解を深めるための小テストは各講義で来年度も実施し、ノートを取りやすい資料の開発を心がける。また、パワーポイントのスライドの進行速度も、ノートをとるのが遅い学生のために、予備の資料を複数準備して、周りに遠慮して書き写せないまま置き去りにされないよう配慮したい。

以上のような工夫を加え、次年度も引き続き、学生の授業への期待感に応えられるように努力したい。

(3) 2年次春学期「科目C」担当C

D [現状説明]

保育士及び幼稚園教諭資格のための科目である。保育所保育指針や幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂により食育の推進がより一層重要項目となった。0歳児からの子どもの食事の現状を踏まえ、具体的な事項をたくさん取り入れ、「子どもの食と栄養」の理解を深めること、また、現場で活用できる知識や技術の習得の必要性があると考え授業を進めてきた。

また昨年度のアンケート結果から、授業内容を改善した。事前学修や小テストは引き続き実施し、ノートの整理がしやすいようパワーポイントの活用に力を入れ、文字の大きさや内容の充実を図った。

C[点検・評価] アンケート結果（6月11日・7月23日に実施）

アンケート項目	1回目 22名 6月11日	2回目 24名 7月23日
1. 話し方や説明の仕方		
① わかりやすい	19名 (86%)	20名 (83%)
② どちらかというとわかりやすい	3名 (14%)	4名 (17%)
③ どちらかというとわかりにくい		
④ わかりにくい		
2. パワーポイントの文字やスライドの速さについて		
① 文字の速さや大きさは丁度良い	12名 (55%)	11名 (46%)
② 文字の大きさはよい、ゆっくり進めてほしい	10名 (45%)	12名 (50%)
③ 文字を大きくしてほしい		1名 (4%)
④ ゆっくり進めてほしい		
3. 授業の進め方について		
① これくらいの速さでよい	10名 (46%)	11名 (46%)
② どちらかというとこれくらいの速さでよい	4名 (18%)	7名 (29%)
③ どちらかというと少しゆっくり進めてほしい	8名 (36%)	6名 (25%)
④ もっとゆっくり進めてほしい		
4. 授業の内容について		
① 関心を持てる内容である	21名 (95%)	21名 (87%)
② どちらかというと関心を持つ内容である	1名 (5%)	3名 (13%)
③ どちらかというと関心を持てない内容である		
④ 関心を持つことができない内容である		
5. 今までの授業の中で、心に残ったこと		
・調乳したこと (13名)		
・食物アレルギー児童の対応など(18名) (エピペンの講習会をしたこと)		
・手遊びや食育に関する遊びを学んだこと(5名)		
・「行事食について」事前学習をし、発表したこと (5名)		
・施設での給食について学んだこと(3名)		
・離乳食の重要性について、学んだこと (2名)		
・将来自分の子どもを育てる時に役に立つ話を聞けたこと		
・「食育かるた」を作成したこと (2名)		
6. 要望		
・子ども用のお菓子作りの実践をしたい		
7. 今後の自分の取組		
・子どもの食と栄養の関心を持ちこれからも学んでいきたい。(3名)		
・テストに向けて復習をしていきたい (9名)		
・先生が話す内容もしっかりと書き留めていきたい。授業に集中していきたい		
・三色食品群を意識しながら食事をしていきたい		
・食育の重要性を理解していきたい		
・資料などをしっかりと整理し、学修をする		
・復習をしっかりと子どものための食育を考える		
・アレルギーについて積極的に学び、保育するときに知識を役立てたい (5名)		

- ・「食育の推進」ができるように学習に取り組む
- ・食材の調理方法を学んでいきたい
- ・食育での保護者対応を学んでいきたい（2名）
- ・子どもたちに楽しく食育を教えていきたい
- ・食事の大切さを知ったのできちんと理解していきたい（5名）
- ・実習に向けて学んだことを生かしていきたい
- ・健康や食のことをもっと学んでいきたい（4名）
- ・自分が母親になったときに授業の内容を覚えていたい

<アンケート結果の考察>

1回目・2回目のアンケートからは、授業内容に関心を持ち、意欲的に学ぶ姿勢を感じられた。出席率もよく、課題も期限を守り丁寧なレポートが多かった。今後の自分の取組では、たくさんの意見が書かれており、学習意欲を感じた。ノートの整理がしやすいようにパワーポイントを作成したことで、授業内容を理解し、学修意欲につながったのではないかだろうかと考える。

A[改善策]

- ① 毎回の授業の復習を行うことにより、理解を深めていくことを引き続き行う。
- ② 定期的に復習小テストを実施する。
- ③ 事前学修や課題に意欲的に取り組めるよう、興味や関心が持てる授業内容にする。
- ④ 実技や製作活動も取り入れて具体的な授業内容にし、理解度を深める。
- ⑤ 乳幼児の食育に関心が持てるよう指導案を作成し模擬保育を行い、実践力につける。

(4) 2年次秋学期「科目D」担当D

D[現状説明]

「科目D」の履修者は、幼保の資格免許の取得に係る科目であるが、選択科目として、資格免許不要の学生も含まれている。2018年度から実施となった改訂『幼稚園教育要領』及び改定『保育所保育指針』に即した授業構成では、それ以前よりも指導内容が複雑化している。それは、「知識・技能の基礎」「思考力・判断力等の基礎」「学びに向かう力・人間性等」の幼児期に育みたい資質・能力の3本柱の理解から始まり、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の力を視野に入れながらの指導内容になっているからである。さらに発達区分による指導事項の明確化・細分化に合わせ、基礎的な実践力につける必要のある科目となっていることから、保育者になるという明確な意欲が欠けている場合、単位取得困難な科目であると考える。

DVD視聴は特にイメージしにくい乳児の言葉の獲得に限ることとし、児童文化・保育指導案立案・指導計画に基づく個別実践と評価(デジタルカメラによる撮影)、child vision作成による乳幼児の視界体験、ポートフォリオによる評価の視覚化に努めた。

なお、アンケートは中間時期と最終時期に実施したが、履修内容が変わるために、最終アンケートの質問項目を増やしている。

C[点検・評価] *中間 2019.11.20(26人) 最終 2020.1.23.(24人)にアンケート実施

項目	そう 思う		思 う		余り思 わない		思 わ ない	
	中	終	中	終	中	終	中	終
① 授業を通して 乳幼児の言葉の発達のイメージが具体的に把握できた。	21	16	5	8	0	0	0	0
② スライド表示のレジメやDVD視聴による講義や解説は 理解しやすかった。	20	20	6	4	0	0	0	0
③ 豊かな言葉をはぐくむ歌や手遊びなどの習得に意欲的になった。	20	17	6	7	0	0	0	0
④ 自修シートにより、主体的に授業外でテキストを見直したり専門用語を理解したりした。	7	16	19	7	0	0	0	1
⑤ 絵本やお話教材に関心をもち、主体的に実習に向けて準備を進めている。	11	13	15	9	0	1	0	1
⑥ 指導案作成のコツの資料を参考に立案のポイントを理解し、部分指導案を書くことができるようにになった。	5	12	15	9	0	2	0	1
⑦ 友人が作成した教材や保育指導案に興味をもち参考資料としている	19	21	7	2	0	1	0	0
⑧ 2回のループリックによる保育指導案添削と評価は理解できた		15		7		1		1
⑨ チャイルド・ビジョン体験で乳幼児の視界を理解し保育で配慮することが理解できた		18		6		0		0
⑩ 模擬保育を通して読み聞かせに関する指導法や保育者としての配慮が理解できた		18		4		1		1

【自由記述の内容】

- ・音を使った授業が興味深い。
- ・体や能力の発達が分かった。
- ・専門用語が覚えにくい。
- ・子どもの気持ちになって作成できた。
- ・模擬保育では臨機応変が必要。
- ・友人の工夫や自己の課題が明確に分かり練習をした。
- ・添削や教材作成、模擬保育は役に立った。
- ・模擬保育を見ることの意味が分かった。
- ・2回の立案と教材作成で自己の課題と工夫を見つけられた
- ・指導案を書く練習ができて安心した。

(1) 効果が上がっている事項

- ①「自修シートにより、主体的に授業外でテキストを見直したり専門用語を理解したりした」では、提出を履修後期とし保育の実践に向けて分からぬ言葉とその意味を調べることを事前事後学修として課したものである。配布資料は使用せず、自修シートを試験時に持ち込みとしたことで意欲が増したと評価できる。
- ②「絵本やお話教材に関心をもち、主体的に実習に向けて準備を進めている」では、模擬保育の実践が準備と試行にかなりの時間を要することが理解され、図書館での展示を見たり導入としてふさわしい遊びのレパートリーを増やしたりする努力をしたと評価できる。
- ③「指導案作成のコツの資料を参考に立案のポイントを理解し、部分指導案を書くことができるようになった」「友人が作成した教材や保育指導案に興味をもち参考資料としている」では、2回の保育指導案立案の課題に関するものである。提出した学生全員の保

育案を印刷し資料とし2回配布した。また、添削とポートフォリオによる評価表を付けた返却することで、領域「言葉」の分野を主とする保育指導案作成をおおむね理解できるようになったと評価できるが継続学修が必要な分野でもある。

(2) 改善すべき事項

*来年度はこの科目は開設されない

① 他科目・図書館との連携

実習関連科目とは引き続き連携を図り、学生の学びの状況や作成資料を渡すだけではなく共有したい。今年度は図書館の一角で、教育実習に関する絵本の展示を依頼し教材選定についての解説を行うことができた。さらに、豊かな言葉をはぐくむ教材としてふさわしい絵本や遊びの展開に活用できる図書の購入を増やし学生が活用できるようにしたい。

② 児童文化の教材作成体験

保育・教育実習現場では、学生がどのような教材を使って子どもの生活を豊かにするかという視点でも評価をしている。大学で何を学んできたか、自分で試行錯誤して教材を作りためているか、またそれを使いこなすだけの力をつけてきたかという点で資質・能力が測られている。事前事後学修時間を活用し、教材を自分で作りためることに慣れさせたい。

③ ループリックでの評価と学生自身の評価の融合ができるのかどうかの検討

学生の自己評価点はかなり高い。まだ保育の現実が理解できていないので、一つ一つの課題に安堵している状態だ。実習では複数の課題に対して、同時にこなす実践力が必要であり、評価の視点の調整が必要だ。なお、2回ループリックでの評価に異議はなかった。

④ 情報機器使用後の活用

模擬保育時に撮影し合ったが、どう活用するかについての指導の改善が必要である。

(5) 2年次秋学期「科目E」担当E

D [現状説明]

教育方法の範疇は幅広く、課程論、概論、原理とも重なる部分もある。履修者は保育・幼稚園・小学校教職希望者が受講している。学生にとっては、親しみにくい学問分野かもしれない。そのため、少しでも興味関心を高めるために、事例を多く取り入れるとともに、書くことや、復習課題を大切にしながら授業を進めた。

C [点検・評価]

<アンケートの実施>

中間期 11月、最終期 1月 表示サンプル数 (11月=31 (1月=30)

○授業内容について

(1) 11月の設問 説明はわかりますか。

1月の設問 (要望により、復習課題を数回) パワーポイントではなく、黒板授業も採り入れましたが、説明はわかりましたか。

アよくわかる イ何とかわかる ウあまりわからない エわからない (理解できない)

ア 11月27人 1月25人 イ 11月4人 1月5人

<学生より 11月の意見>

・曜日によっては5コマともパワーポイントなので、目も体も疲れます。なじみのある黒板を使った授業もしてほしい。

・ホワイトボードが光って見にくい時がある。(AH 5時間目)

・事例が多いのはうれしいけど、シラバスすべてを網羅できるのでしょうか。

<1月の意見>

・後半になって、進度が早くなり、ついていくのが大変だった。

・現場で体験するであろう事例がたくさんあって、イメージしやすかつた。

<点検・評価>

今年度の受講生は応答が良く、双方向のやりとりをする時間もとれた。30 数名全員が発言することは難しいが、答えが限定されないで複数あるような質問をするようにした。

記名のアンケートにもかかわらず、要望も含めて、かなりの学生が意見を書いていた。学年のカラーにもよるが、良い傾向だと言える。事例を核にして授業を進めてきたことについては、学生の意見にもあったように、シラバスの内容に軽重がついてしまったことは反省すべき点である。

(2) 11月『教育・保育に心理学を!』を軸にして授業を進めています。

1月 前回同様『教育・保育に心理学を!』を軸にして授業を進めてきました。

※11月の要望を取り入れ、黒板を使った授業を意識して実施した。

アよくわかる イ何とかわかる ウあまりわからない エわからない(理解できない)

ア 11月23人 1月26人 イ 11月8人 1月4人

<改善してほしいことがあれば書いてください>

<11月の意見>

○現場での授業の組み立て方を詳しく知りたい(小学校希望者)

○口頭で大切なことを聞くが、早いのでメモできない(事例は文書化しなかった)

<1月>

○書くことが多すぎてしんどかった。

○パワポよりも、小学校から高校まで慣れている黒板指導がわかりやすかった。

○教育に心理学の知識は必要だと痛感した。

<点検・評価>

昨年度は一方向の授業が多かったが、今年度は活発に議論できる場面もあり、学生が自分の考えを持つ良い機会となった。書き込み資料として与えたパワーポイント3段配布資料が、真っ黒になるまで視写、聴写、自分の考えに分けて書かせた。途中でペンが止まってしまう学生も見受けられたが、教育方法論の基礎としての知識を定着させるためには、書かせることは、効果があったと考える。

(3) 授業内容は今後の自分に役に立つことがありますか。

ア大いにある イあるかもしれない ウあまりない エあるとは思えない

ア 11月28 1月30 イ 11月 1月 0

<改善してほしいことがあれば書いてください>

特になし

学問がすぐに現場の実践に結びつくとは限らない。また、「わかる」と「できる」には表現できないほどのギャップがあるのも事実である。学生が科目E15回の中で、近未来の自分に何をどう生かせるのか定かではないが、「わかる」が少しでも多くなることで、今後の自分に役立てたいと考えてくれることを願っている。

(4) ふりかえり(自由記述)

15回を振り返って、以下のような感想、質問、要望が得られた。

① 良かったこと

- ・板書とパワポの組合せで理解が深まる。
- ・心理学を切り口にした教育方法の授業は現場で活かせる。
- ・事例がテーマごとにフィットしているので将来の参考になる。
- ・考える時間が設定されているので良い。 他

② 改善希望

- ・パワポの積み残したコマの資料はいつするのですか。
- ・前にも聞いた事例（教育心理学）を二度目に聞くと、新鮮さがない。
- ・書くことが多すぎて余白が小さかったので、苦労した。他

以上 アンケート結果

A[改善策]

アンケート結果より、今回も昨年に引き続き、「書くこと」を重視して進めた。学年のカラーもあるだろうが、今年は反応もよく、質問も多く出た。指名されることに慣れていけば、双方向のやり取りができる、より授業内容が深まることだろう。

科目Eも日進月歩、激変する社会の中で動いていく。学生には、わたしが、学校園で得てきた新しい事例や課題を紹介しながら授業を進めていきたい。

（6）2年次秋学期「科目F」担当F

C [点検・評価]

「科目F」の授業において、6回目である11月7日と、15回目の1月30日の計2回、授業アンケートを行った。

科目Fは、選択科目で、教職・保育の資格を取得する学生を対象にした授業である。生活の歌の弾き歌い、動きのリズムについての学びと実践、「海星☆音楽フェスティバル」の企画・準備及び練習が主な内容で、授業形態は一人一台のクラビノーバを使用しながら、演習を中心に行っている。

質問項目は、

- 1時間に対する課題の量（自宅学習）が多い。
- 授業時の説明はよくわかる。
- 音楽に対して、以前より意欲的になった。
- 音楽に秀でた保育者になりたいと思う。

の4項目である。それに対し、

（④とてもそう思う ⑤少しそう思う ⑥あまり思わない ⑦全く思わない）
で回答を求めた。以下がその結果である。

[1回目]

	④	⑤	⑥	⑦	
1	1	12	7	0	
2	8	11	0	1	
3	8	8	3	1	
4	10	10	0	0	

n=20

[2回目]

	④	⑤	⑥	⑦	無効
1	0	10	11	2	1
2	11	13	0	0	0
3	6	16	2	0	0
4	15	2	1	0	1

n=24

1回目の自由記述に、「楽しい」「丁寧な指導」以外に、「指示から開始までの時間が短く、準備しきれず焦る」という意見があったので、それ以降は意識し、時間配慮を行った。また、「練習時間の確保が難しく、普通に悩んでいます」という素直な声もあった。

2回目の自由記述では、「曲が完成しないまま次の曲に進んでしまうので、もう少し時間をかけてほしい」（3名）、「音楽会よりも、実習に必要な弾き歌いや、ピアノの指導をしてほしい」（2名）等の意見があった。

A[考察と改善策]

受講生のピアノの技術に関しては顕著な差が認められるので、どこに焦点を置くかが非常に難しい問題ではある。しかし、2回目のアンケートにおいて、半数の学生が自宅学習の量が多いと思っていないことから、授業は説明に過ぎず、自宅練習が必至で、自主学習にお

いて曲を弾きこなせるように高めることが必須であることを繰り返し説く。そしてさらに確認テストを必ず実施し、完成に導くことの必要性が考えられる。クラス授業において、課題を能力別にすることは難しいが、個別に目標を定めさせて、学習を進める工夫をすることも必要である。しかしながら、音楽会よりも個人のピアノ指導という意見に対しては、音楽会出演のための、企画・計画・実行の経験が現場で大きな力になること、個人ではなくクラスの仲間と共に演奏することで、個人では経験のできない音楽を体感することができること、それにより音楽力も高められることなど十分時間をかけて伝えていきたい。

初等音楽は、1・2・3・4と4つの科目として成立している。音楽という教科の特徴から、領域ごとの知識を修得しながら、技術面においては長期間にわたりこつこつ積み上げていく必要のある科目である。それゆえ「初等音楽」という括りではあるが、1～4それぞれ内容や目標が異なり、将来教職・保育に関わるすべて学生が、1～4すべてを受講することを前提にシラバスを考えている。「科目F」では、みんなで音楽を作り上げることを実体験することも目標の一つにしている。今後は、科目のシラバスを確実に説明し、「初等音楽4」では再び個人の技量を伸ばしていくような演習を増やすつもりである。

(7) 3年次春学期「科目G」担当G

D[現状説明]

- ・幼免許の取得に向け、2年次の教育実習後、自身の課題を踏まえて臨む科目である。
- ・幼稚園教育要領の再理解を基盤として、教材研究と作成、演習、幼稚園での保育体験を取り入れ、実践的指導力を育むよう授業を進めている。
- ・筆者自身が6年間担当する中で、徐々に授業内容が実技中心になってきている現状を打破すべく、実技内容の見直しと指導案立案の2点を取り入れて授業改善を図ってみた。

C[点検・評価]

<アンケートの実施結果>

6/27(11回目の授業日) 回収率 92% 7/25(15回目の授業日) 回収率 100%

NO.	項目	6/27 → 7/25 (数値は%)			
		4	3	2	1
1	教材研究・作成・演習を振り返し行い、この授業はむしろ濃密な内容です。 自身の授業への取組は充実していましたか。	35 → 60	52 → 40	13 → 0	0 → 0
2	教職員間の連携を目的として、この授業ではグループワークを取り入れました。 自身の中に協力・協同・連携・共有という姿勢は育まれてきましたか。	48 → 76	52 → 24	0 → 0	0 → 0
3	人形劇・パネルシアター・マリア幼稚園での活動等に取り組む際、子どもの発達を意識して保育を考えようとする気持ちや姿勢が身に付いてきましたか。	22 → 44	61 → 56	17 → 0	0 → 0
4	人形劇・パネルシアター・マリア幼稚園での活動等に取り組む過程で、子どもたちのために美しいものにしようと心がけたことはありましたか。	48 → 76	52 → 64	0 → 0	0 → 0
5	大学での学び3年目となります。2年の頃振り返り、幼稚園教育についての専門的な知識や専門的な指導技術は次第に身につけてきましたか。	17 → 44	83 → 56	0 → 0	0 → 0
6	幼稚園教育・保育で使われる専門的な用語を覚え、使えるようになってきましたか。	5 → 20	78 → 80	17 → 0	0 → 0
7	幼稚園教育・保育には理論としての深みがあります。少しは教師の役割の重要性や教師としての責任の大きさを理解出来るようになっていますか	30 → 36	65 → 64	5 → 0	0 → 0
8	これからも教育実習に向け、この授業での成果を活かそうという気持ちでいますか。	70 → 84	30 → 16	0 → 0	0 → 0

(1) 効果が上がっている事項

- ①教材作成・演習・指導案立案を一つの流れとして実体験中心の授業を進めたことで、授業への前向きな取組と手ごたえを感じている。

- ②人形劇からペーパーサートへ実技を変更したことが、指導案立案・振り返りの時間・指導案再作成という授業内容の深まりとなった。そのことが、専門的な学びや指導技術、教師の役割の理解につながっている。
- ③マリア幼稚園での保育体験に向けて、子どもたちのために楽しい保育をしようという個々の姿勢と皆で協力して取り組もうとする気持ちが育まれてきている。
- ④11月の教育実習に向け、この授業での成果を活かそうという気持ちが大いに育まれている。上記が授業効果としてあげられる。3年次生ともなると、アクティブ・ラーニングを意識した授業を行うことで、子どもを身近に感じながら、幼稚園教員としてのやりがいと達成感を感じてきていることが推察される。

(2) 改善すべき事項

昨年度の授業アンケート結果と比較すると、授業改善の成果なのか学生気質が違うからなのか、かなり数値がよくなっている。

ただ、授業担当者としては、まだまだ課題と感じるのが下記の3点である。

- ①子どもの発達を把握する力が付いてきたか。
 - ②幼児教育に関する専門的な知識や指導技術は着実に身についてきたか。
 - ③幼児教育に関する専門的な用語を覚え、巧みに使えるようになってきたか。
- また、この授業において、幼稚園教育の基本・幼児理解・保護者支援・小学校教育との接続等々、習得しなければならない内容をどう修得させるべきか授業改善の必要を感じる。

A[改善策]

- ①教材作成・指導案立案・演習・振り返り・指導案再作成という今回の授業改善を再度、熟考する。
- ②PP 等を使用して保育現場の実際や子どもの様子などにふれ、専門的な指導技術の向上に向け更に授業改善を図る。

(8) 3年次春学期「科目H」担当H

D[現状説明]

今学期より、事例が多く書いてある教科書に変えて、より理解を深められるようにした。また、実際体験やDVD視聴を増やすことによって理解を深めるということも毎年の意見としてあるため、できるだけ今年度も授業に取り入れていくようにした。

まとめのプリントを作って渡していたが、毎回の授業でしっかり理解できるように、プリントを毎回作り大切な事柄を記入方式にした。

上記のことを踏まえながら改善に努められるよう、6月と7月の2回アンケートを実施した。

C[点検・評価]

<アンケート結果>

1. 「科目H」の授業の内容は、理解できましたか。

	6月(授業中間時 32人)	7月(授業終了時 30人)
ア. 良く理解できた	19人 (59%)	19人 (63%)
イ. どちらかというと理解できた	13人 (41%)	11人 (37%)
ウ. どちらかというと理解できなかった	0人	0人
エ. 理解できなかった	0人	0人

2. 「科目H」の授業は面白い、また興味がもてましたか。

	6月(授業中間時 32人)	7月(授業終了時 30人)
ア. おもしろく興味がもてた	11人 (34%)	8人 (27%)
イ. どちらかというと興味が	16人 (50%)	19人 (63%)

もてた		
ウ.どちらかというと興味が もてなかつた	4人 (13%)	3人 (10%)
エ.興味がもてなかつた	1人 (3%)	0人

3. パワーポイント、DVD視聴、見学、事例などが授業理解につながっていますか。

	6月(授業中間時 32人)	7月(授業終了時 30人)
ア.繋がっている	24人 (75%)	21人 (70%)
イ.どちらかというと繋がっ ている」	8人 (25%)	7人 (23%)
ウ.どちらかというと繋がっ ていない	0人	2人 (7%)
エ.全然関係ない	0人	0人

4. 授業の進め方で、話し方や説明の仕方は、わかりやすかったですか。

	6月(授業中間時 32人)	7月(授業終了時 30人)
ア.わかりやすかった	22人 (69%)	16人 (53%)
イ.どちらかというとわかり やすかった	10人 (31%)	14人 (47%)
ウ.どちらかというとわかり にくかった	0人	0人
エ.わかりにくかった	0人	0人

<アンケート結果の考察>

⑦ 授業の理解度については、大方の学生が理解できていると表れているが、細かく見ると、6月より7月の方がより理解度が増していると思われる。しかし、実際の定期試験等の成績においては理解できていない学生もいた。この要因としては、毎回の授業時に、振り返りの時間を持っていましたが理解度を増した要因であると考えられる。

パワーポイントやDVD視聴、事例の出し方については、後半効果が上がらなくなっている。これについては、パワーポイントが分かりにくかったこと、教科書の事例が、逆に分かりにくく、実感しにくかったかもしれない。

授業の進め方については、大方の学生は分かりやすかったとしているが、後半の進め方については改善すべき点があったと学生の反応から見える。それについては、プリントへの記入が多くなったことも起因しているのではないかと思われる。

「保育内容の研究・環境」の授業への興味がない学生が 10%いたが、記述式のところで、理由として、幼保の方向に進まないため、幼保の勉強は自分たちに関係ないからということをあげていた。小学校に繋がる話もしているので、小学校教諭を目指す学生の中には、「環境」というものの重要性をしっかりと学べている学生もいる。

⑧ 授業全般についての感想、要望については下記のような意見があった。

- ・「環境」というものが、子どもにとって大切であるということが授業を通して伝わった。
- ・子どもにとってより良い環境とはどういうことが学べた。
- ・現場で役立つ。
- ・板書が分かりやすい。
- ・DVD視聴で、頭に残りやすい。また興味がわく。
- ・保育所見学で、実際に体験できたことがよかったです。

- ・保育者として「環境」をどう考えるかが分かった。
- ・実際に行った保育所見学、春探しなどで、授業がより良く分かった。
- ・話が分かりやすく興味がもてた。
- ・授業が楽しかった。
- ・プリントが分かりやすかった。
- ・書くことが多かった。
- ・スライドをもう少しゆっくり進めてほしかった。
- ・スライドの大切な所の色が分かりにくかった。
- ・グループ発表が、学びに繋がった。

(1)効果が上がっている事項

- ⑦ できるだけ教科書だけではなく、DVD視聴や実際の保育環境を見る機会を設けたことは学びに繋がったと思われる。
- ① グループワークやフィールドワーク、乳幼児が喜ぶ手遊びなどを取り入れたことは、授業への興味に繋がったと思われる。
- ⑨ 毎回のプリントでの進め方で、書くことが多いが、学びに繋がっていると実感する。

(2)改善すべき事項

- ⑦ 「環境」については、盛りだくさんで、15回では終わらないくらい伝えることがたくさんあるため、後半駆け足になってしまった。もう少し全体のバランスを考え、授業の組み立てを考えていかないといけない。
- ① 「環境構成」を考えるにあたって、身につけていく為、実際に演習して実践に繋がるようにしていかないといけないが、その辺りの授業のやり方を考える必要がある。

A[改善策]

- ① 実際に保育所現場を見ることなどやDVD視聴、事例をあげること、「環境」をどう考え、楽しく保育に組み込んでいくかを伝えることは、引き続き来年度も取り入れていくこととする。
- ② 準備学修や復習がほとんど学生任せではできていないため、毎回授業の振り返りの時間だけではなく、復習プリントを作ったり、確認テストをしたりして、予習復習をしっかりし、理解度を増すようにする。
- ③ 実際に演習の時間を設け、「環境」についての理解を増し、保育に繋がるようにする。

(9)3年次春学期「科目I」担当I

D[現状説明]

この授業は、心理学の学術的な論文の構造と読み方について学ぶ授業である。授業は論文を読んで、まとめ、分かったことを発表する形式で進めた。この授業で初めて本格的な学術論文と触れ合うという学生もいる。そのため、授業で読んだ論文について、注目すべき部分、論文を専門的に理解するための基礎知識を含め、教員が解説する時間を授業内で設けた。

この授業では、2回アンケートを行った。1回目は8回目の授業である2019年6月10日(月)、2回目は15回目の授業である2019年8月29日(月)に実施した。

C[点検・評価]

<アンケート結果>

1.授業の内容、特に心理学の学術論文の読み方について、分かりやすかったですか	6月 (回答数13人)	8月 (回答数17人)
(1)分かりやすかった	7人	8人
(2)どちらかというと分かりやすかった	6人	9人

(3)どちらかというと分かりにくかった	0人	0人
(4)分かりにくかった	0人	0人

2.授業の説明の仕方や話し方は、分かりやすかったですか	6月 (回答数 13 人)	8月 (回答数 17 人)
(1)とても分かりやすかった	10人	11人
(2)どちらかというと分かりやすかった	3人	6人
(3)どちらかというと分かりにくかった	0人	0人
(4)分かりにくかった	0人	0人

3.パワーポイントのスライドの文字やスライドの速さは、見やすかったですか	6月 (回答数 13 人)	8月 (回答数 17 人)
(1)文字の大きさも速さも丁度よい	12人	14人
(2)文字を大きくしてほしい	1人	2人
(3)スライドの速さをゆっくりしてほしい	0人	1人
(4)文字を大きくして、スライドの速さをゆっくりしてほしい	0人	0人

<アンケート自由記述欄>

① 第1回目のアンケート

・専門用語をたくさん使った論文は難しい。(3)

・先生の説明や解説が分かりやすい。(2)

・論文を読んで、新しいことが学べた。

② 第2回目のアンケート

・興味のある論文が多かった。

・様々な論文を読んで、心理学に興味が持てた。自分でも調べてみたい。等 (3)

・先生の説明や解説が分かりやすい。(2)

・論文は難しいイメージだったが、読むコツを掴めば、自分なりに理解しやすいと分かった。

・論文を読むことに慣れた。卒業論文に繋げたい。

・論文を読む時間が長かった。

・論文を読みやすくする方法を学べた。(3)

・論文における図の大切さが分かった。

・難しい専門用語がたくさん出てきて、勉強になった。

(1) 効果が上がっている事項

⑦ 論文を初めて読む学生が多かったため、授業の始めは論文を読むのが難しいと感じている学生が多かった。論文の内容や専門用語、背景にある心理学の知識を解説する時間を設けたことで、論文の内容が理解しやすくなった。アンケートでも、論文が分かった、説明が分かりやすかったと回答した学生が多かった。

⑧ 学生が自分で論文を読んで分かったことをまとめることで、自分なりに論文を読みやすくする方法が学べた。

⑨ 学術論文をいくつも読めたことで、自信がつき、心理学を学ぶ意欲につながった。学生によつては、自発的に心理学の分野を調べようとする、卒業論文に繋げようとする姿勢が見られた。

(2) 改善すべき事項

⑩ パワーポイントで論文の解説を行ったが、文字を今より大きくしてほしい、スライドをゆっくり進めてほしいとアンケートで回答した学生が見られた。スライドを作成する際に、なるべく見や

すい大きな文字にする、スライドをゆっくり進める工夫を行う必要がある。

- ① 論文を読んでまとめる時間を多めに設けたが、読むのが速い学生もいるので、適宜、様子を見ながら、設ける時間を調節する。
- ② 初めて論文に触れる学生が多いので、専門用語や背景知識の解説を更に分かりやすくする。

A【改善策】

この授業は次年度、筆者が担当しなくなるが、今後の授業に生かすべく、改善策を考察した。学生が学術論文に初めて触れるなどを念頭に、論文を読んでまとめ、発表するだけでなく、論文を理解する上で必要な専門用語の知識、背景となる心理学の理論を解説する時間を大切にすることが重要である。また、論文を自分なりに読めたことが、自信につながる学生もいる。論文を学生自身が読み、まとめ、発表する時間と論文を解説し、論文の内容をきちんと確認する時間の両方をバランスよく取っていくことが必要である。より分かりやすい授業を目指し、スライドを見やすいように改善する、論文を読んでまとめる時間を調節するなどの改善策が考えられる。

4. A【学科の改善策】

学生の主体的な学びを通して、保育士・教員としての資質を高めるために、来年度は次のような取組を実践していくことにする。

- ① 学生の主体的な学びにつながる授業内容や授業方法を工夫する。取組を検証するために、授業アンケートを実施する。
- ② 教材作成・指導案立案・模擬保育等を通して、実践力を付ける。
- ③ 図書館との連携を図り、実習や授業に役立つ絵本・資料を学生に提示する。
- ④ 小テストを実施したり、効果的にパワーポイント等の情報機器を使用したりすることで、理解度を高める授業内容にする。

C

C₂